

504

30

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10¹⁹ 10 1 2 3 4 5

始



エト 6R-55

504-30



南
澤
月
友
著

久遠の光

發
兌

東
京
國
民
精
神
社

大正
11. 5. 10
内交

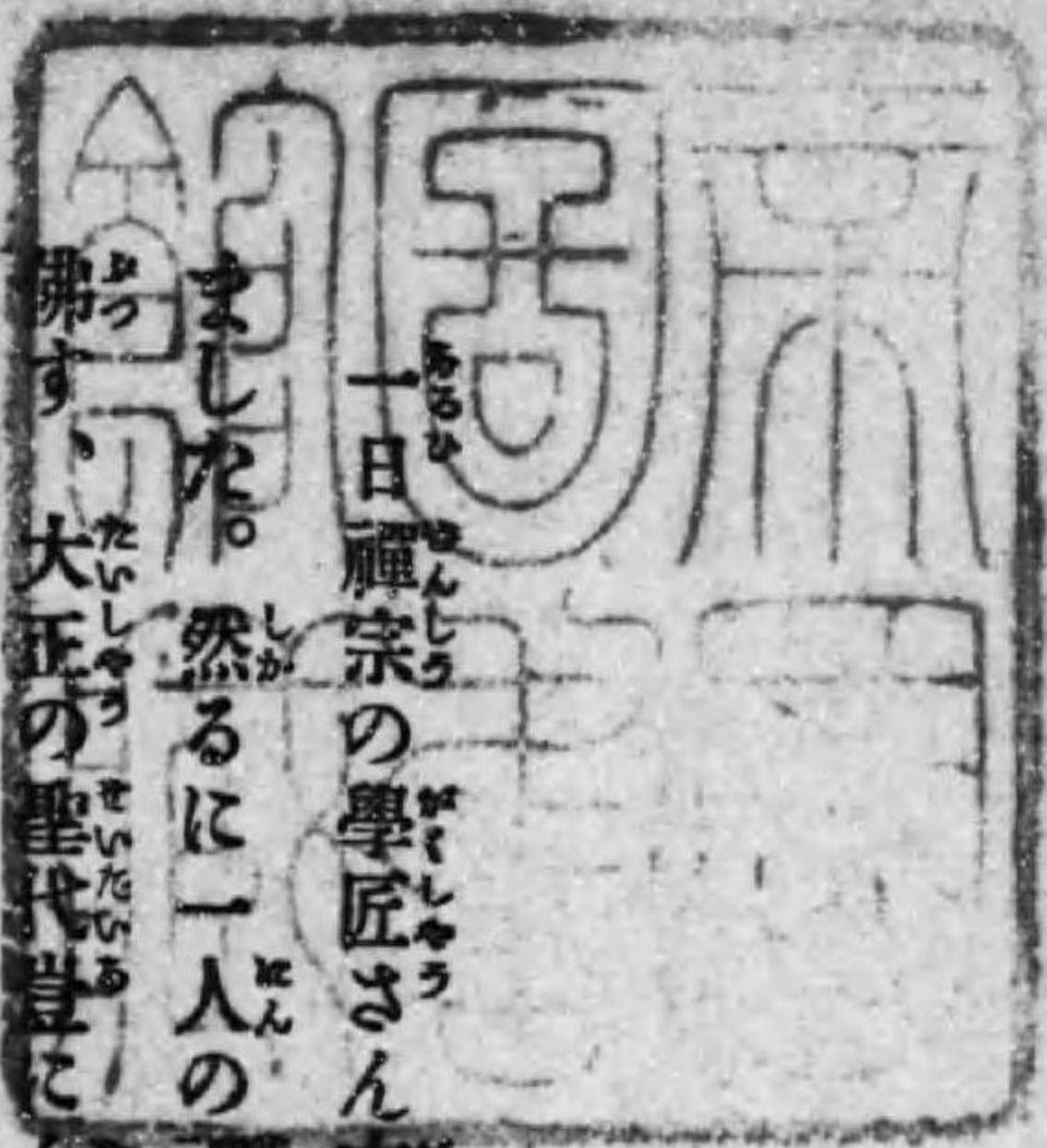
序 文

禪は宗教の極致にして古今を超越せる至誠一貫の大道、時と處とに依りて其の本来の風光を變ずる事なし。而かも印度の禪、西藏の禪、支那の禪、地處の異なるに伴うて活現の相狀必ずしも相一致せず。王朝の禪、江戸の禪、明治の禪、時代の變れるに従うて應用の妙趣必ずしも相等しとせず。是を以て大日本帝國、大正新時代の禪風また其の特色たる處無かる可からず。本来の風光、舊によりて法爾如然たりと雖も、相狀妙趣、是に一新機軸を開きて、方今の世局に處する現代人士の精神的資糧となるもの、是れ禪の先天的使命、乃ち「大正禪話」の著ある所以なり。所説なほ全を盡さず、隔靴搔痒の憾あれ共こは著者

が短才不敏の致す處、幸に十方諸君子の寛恕を祈る。信州姥捨の山麓、清風颯々
の月都にありて、大正第九庚申の初秋、川中島の古戦場を眼下に見やりつゝ。

月友女史誌す

大正久遠の光



南澤月友女史述

一日禪宗の學匠さん方が月友の禪堂を訪はれた。月友は相當に御待遇を申し
ました。然るに一人の禪論者なる道人の申さるゝには「昔し龍女七才にして成
佛す。大正の聖代豈に女流の禪論なからんや」と、月友は何てすと追究すれ
ば、道人は笑て夫婦喧嘩の御話ですと逃げられた。「ツマラナイ」と例の十八番
を連發した。道人は徐ろに云はれた。達觀すれば夫婦喧嘩も歐洲戦争も同じこ

とだ。高所は高平低所は低平とは高祖永平の所説ぢや、佛心印の眞髓は茲にあるのだ。若しも高處は低平であつたならば一切萬物の戦争が始まる。今までの戦争はドウデス？然るに本年は、平和の祥風吹き來りて此の戦塵を拂ひ去り御題のそれの如く朝晴雪の景色とはなんと目出度いではありませんか。

月友はソコデ世間の批評や罵言を顧みず、皇恩と佛恩に報答せんことを思ひ世界大戦役後この嬉しい平和の來りしを記念するため、女流にして失禮ですが吾が同胞姉妹は勿論有髯の君子諸氏にまでも禪に對する一己の意見を申しあげて見たいと思ひます、間違たら遠慮なく親く教へて下さい。サテ女流にして禪とは何ぞや、など標榜すれば上は大學の博士より下はお寺の小僧さん迄不思議眼もて見たり、又聞かんとするであらう。「實に御尤です」なぜなれば専門の禪宗の

和尚さんさい御話するとが面倒だと云ひますから、然し考へて見れば大正の今日ですもの何とか云はれましようよ、デスカラ月友は嗚呼かましかれど大正禪話の題下に就て試みに述て見ようと思ひます。聞て下さい、見て下さい、いま禪學を説かんとするには釋迦牟尼佛は忘れられない、釋迦牟尼佛を説かんとするには、釋迦氏の系統がまた忘れられない。是れ舊式の様ですが一寸簡單に釋迦氏の因縁を述る次第です、暫く御辛棒を願ひます。噫國亡びて山河在りてす、ガンデスの流は涎々として、千古に長いではありませんか。ヒマラヤの雪は皚々永久に清いてはありませんか。今月友が述べんとする釋迦氏は今を去ること二千六百有餘年前即ち西曆紀元前六世紀の頃此の處に王國を建てたと云ふことです。歴史的考證は固より學者方に讓ることとして少しく傳説的ですが女

流の御話ですもの笑はないで聞いてください。

釋迦氏の祖先は大劍賢王と云ひました、夫より三十六代が師子頰王此の御方の御子さんが七人ありましてその長子が所謂淨飯大王様で釋尊の父上様であります。淨飯大王は元來剛毅勇壯の御性質で徳高く慈悲深き御方でありました故人民は悦び服し政令は正しく行はれ國が能く始まりました。而して第一の王妃は驕曇彌夫人とて其風姿花の如く第二の王妃は摩耶夫人とて其容貌月にも似たりです。まして其の心根の清く麗はしきこと雪にもくらぶべきでありました。淨飯大王はこの雪月花の美と善とを得られまして月の夕べ花の朝、何に一つ不自由もなく暮らされましたが、日月の過ぐるは早き者にていつしか四十の玉齡を越えられました。ソコデ考へられた、婦人は愛らしきものである、雪月花は樂

しき者である。去りながら吾が世を譲るべき子寶がなくては、實に人生は無趣味のものである。何とかして子寶を得るの道はなきかと御心を勞させまして、仙人にも占はせられた、神佛にも至心に祈願を籠められた。然るに不思議ではありませんか一夜第二の王妃摩耶夫人は諸天諸菩薩に守護せられて日の如き光を放てる御佛が玉音朗らかに「如何に婦人よ御身に結ぶ縁深ければ今衆生濟渡の本願を父となし汝ら夫人を母と頼み此の娑婆世界に降らんとす、暫く汝が胎内を貸し與へてよ」と云はれたと夢を見て醒めた。それよりは日に月に身重とならせられて鳥歌ひ花笑ふの好時節。西曆紀元前五百十年四月八日の曙の頃太陽將に空を破り地上に光と熱とを投げんとする時。中天竺迦毘羅王城を去る遠からざる嵐毘尼園中無憂樹の下に於て眞金の色を帯び玉へる玉の如き王子が躍

然と生れました、天は曼陀羅華と摩訶曼殊沙華とを雨らし、八大龍王瑞雨を注て凡ての不浄と天地を清めました。

○

さて皆さん前に月友が述べました所で云はいても三界の大導師大聖釋迦牟尼佛とならせ玉ふ王子が此世に降誕しました事が御解りてありましやう。ソコデ不思議ではありませんか生ると同時に此王子は安祥として前に七歩を進め玉ひ右手に天を指さし左手に地を指さし『天上天下唯我獨尊三界皆苦我當安之』と金鈴振ふが如き御聲にて唱へさせられたと云ふ事です。これは我は佛陀となりて正覺を成し三界の苦の衆生を濟度してやらうと云ふ意味ださうです。何と有難いことではありませんか。

それから此王子は如何かなされたかと云ふに漸々御成長に相成り九重の雲深き所に於て傳育せられ身には常に金縷綾羅七珍萬寶を纏はれ美味美食既に舌に飽き美聲美音の天樂は同く耳に充ち眼耳鼻舌身意の樂みに於て何一つ缺けたる無く圓滿なる御教育の有様は今日各國の王族が其王子を傳育せらるゝ有様に見ても想像するに難くはない、而も一人の御子様で聰明叡智萬德圓滿とありますから、大王様も摩耶夫人にどんなに可愛く御召したてしやう。去りながら人世は悲惨の事のみ多いです、無常の風は時と場處とを嫌はず、王族も選びません貴族も擇びません紳士も恐れませぬ武人も恐れませぬ勿體なや摩耶夫人は産後一週日を出でざる内に産後の肥立ち悪しく終に御かくれになりました。一喜一憂大王様の御心中をさてこそと御察し申しあげます月友は今更ながら釋尊の御

出家も是が第一の動機であらうと思はれます。王子は天資固より聰明絶倫に渡らせられ而も御教育は國王の力を持って與へられましたから一を聞て十を知り文を竭して武に及び國庫傳ふる所の群籍一として通曉し玉はざるなく七歳の時已に天文地理等の諸學に通ぜられ十歳の時諸王子と武術を角し射術の妙を示さんために百歩の距離に於て一箭持て七つの鐵の鼓を射徹せられたと云ひます十五歳にして立ちて太子となられた、十七歳にして耶輸陀羅を入れて妃と致された。そもこの耶輸陀羅姫と申しあぐるは當時拘利城の王女にして太子様と從妹のあいだがらで賢明にして淑徳高く春花秋月のその如く申分のない御立派の御方様でありました太子は其總てが御意に叶ひましたから父大王の御許を得て吉辰を選び玉ひ善盡し美盡したる盛んなる儀禮の許に婚姻の式を行はれた

姫はうれしきおもゝちにて偕老同穴の契りいと濃かに常に太子に奉侍せられましたその有様は明星の月に侍べるが如しとても云ひまじやうか。

去る程に羅喉羅尊者は生れたり迦毘羅王城の春は格別です天の帝釋天の春にもましてせう王妃は笑ひ太子は悦び玉ひおちいさんの大王は大に躍つたてせう。去りながら太子の心中には既に一脉の冷風が通っていた、それはなんてす無常の風です太子は花の如き貴女を見た玉の如き王子を見た。四門に遊んでつくづくと感じられた生老病死の人生の有様を。サータイヘンです最愛なる妻子は悟道の敵であります金殿玉樓は馬鹿の住む巢窟の如くであります錦繡綾羅は乞食非人の衣る着物の如くであります七珍萬寶は怨の集る大都會の如くであります。太子の眼中には名譽もいらぬ城廓もいらぬ大公園もいらぬ貴公子

もいらぬ貴婦人もいらぬ。只要求する所は生老病死と四苦と八苦とを離れたる眞の悟りです。ソコで父大王にもすまない最愛の妻子にもすまない一家親類にもすまない悟りといふ道のために御車舎匿と共に王城を逃れ出てられた。耶輸多羅姫も哭たてせう父大王も嘆かれたてせう一家親類も愁ひたてせうしかし太子も泣かれたそれは人情です。舎匿と愛馬のためには血の涙をしほつた妻と子と王城とを見てはまた血の涙をしほつたしかし、てす眞の悟は檀特山にあつた否菩提樹下にあつた臘月八日の曉の明星にあつた太子は駿馬に乗じてヒマラヤの山麓に到着した。仰むけば高し雪皚々榮枯盛衰は塞翁が馬。

吹かばふけ風

ふらばふれ雨

○

太子は風雨を恐れず苦行を厭はず方に苦行林とて阿羅々仙の主宰する修行道場に入らんとし、茲に愛馬乾陟と御車舎匿とに別るべく餘儀なくせられました。太子は愛馬に向ひはらくと涙をはらはれ「汝畜類なれど心あらば正に聞くべし吾れこれより修行を積み正覺とてサトリを得たる曉には醍醐の法味を持て汝に與へ今日の勞に報ゆべし汝城に歸り其時節を悦び待つべし」と愛馬は耳を垂れ謹んで聞くものゝ如くやがて悲鳴を上げました。更に舎匿に向ひ「あゝ舎匿よ汝忠實なるものよ、汝城に歸らば父大王も一家親族も定めて汝を怨むてあらう去れど是れ汝の罪にあらず吾れの罪なり憂る勿れ汝は王城に歸り吾れこの大決心と今日の有様とを審かに父大王に申し上ぐべし汝の勞に報ゆるは愛

馬乾陟のその如し」と髪を切り摩尼寶珠の瓔珞と共に渡された。舍匿は畜類にあらす至誠の人間でありますから其感激いと甚しく只低頭涙を流すのみである。やがて彼は云いました。「嗚呼太子様よ我れは死を決して其任務を全ふせり王城を出づるの時に死せるものなり再び王城に歸るの志はないのです願くは吾君よ千辛萬苦は固より厭ふ所にあらず、日々夜々左右に奉仕せしめ玉へよ」と太子は一聲高く云はれた「汝畜類に劣るや乾陟に劣らずや吾が正覺の障礙をなさんとならば主従の縁は是れまでなり」と遂に涙を吞んで苦行林に入られた舍匿は止むことを得ず手を合せて太子の後姿を拜し奉り泣く／＼歸途についた「噫如何に衆生濟度の御ためとは云へ金枝玉葉の御身をもて、荒き風にも、逢ひ玉はざる云はゞもやしうどのその如しだなんと場處も場處その皚々たる雪

山のしかも苦行林の修行道場とはサテも／＼

太子は沙彌の姿となり生老病死について諸仙と問答せられた諸仙は太子に及ばない太子は進んで鬱陀羅摩仙の主宰する難行林とて更に々々辛勞多き道場に入られました鬱陀羅摩仙は太子をこゝろむるために種々なる方法にて試験せられた。中に就て月友は女流でありますから婦人につきての御話を極簡單に一つ致しましやう。太子の沙彌は毎日の日課として谷間に水を汲み山に薪を拾はれた、然るに春でありましたから百花爛漫です、すみれもさいたつゝじもさいた満山花ならざるなしです太子は日うけのよき草の軟き畔に腰打ちかけて休息せられた、眠は催ふした遂に華胥の夢に入つた故郷なる迦毘羅王城が現はれた、父王にもあつた、最愛なる妻子にもあつた、心うれしく目が醒た「サテモサテモ

日は西山に隠れんとするか』とて急に薪を負ふて歸られた。憍陀羅摩仙は門頭に出でて待たれた、漸くにして仙窟に歸ればコハ如何に鐵拳どころか太き金剛杖をもて粉な微塵よと呵嘖に遇ふた、息は絶えた、人事不省に陥つた。憍陀羅摩仙はやがて咒文を唱へ蘇せしめた、噫汝ち貴き太子なる沙彌よ、善哉々々我は汝の正覺を欲するため神通力をもて種々の方便を試るのである。汝ち未だ愛欲と忘念とを去らず見よ、彼れなる山谷の暖き所に於て安んて迦毘羅城の夢を見たてあらう耶輸多羅妃と羅喉羅と王城の人々に遇ふたてあらう是れその現證である。去れど般若波羅蜜の命剛杖の下に一たび死したれば無垢清淨の姿である。是よりは名を瞿曇沙彌と改めて大に修行を勵むべしと且つ教え且つ慰められた太子は只うれし涙を流さるゝのみであつた。

太子は沙彌となりて難行苦行十二年、去れど圓滿なる正覺を得られないソコデ伽闍山を越え尼連禪河の邊りに至り菩提樹蔭下にて於て吾れ正覺を乗ぜざれば死すとも立たじと不壞金剛の定に入られた、其間が四十九日であつたといゝます、雪山の雪はますます白いてす、尼連禪河を渡る風はいよゝゝ寒いてす、如何に天竺は暖國でも十二月は寒い然るに十二月の八日は如何なる大吉祥の日でしやう瞿曇沙彌は一躍大聖釋迦牟尼世尊となられました。東の空は自らんだ大聖世尊は偶然にも眼を向けられた、夜明けの明星は光を一段清く放つた何と放つたわからぬコレデスよ今の世間の人々が禪學だの哲學だのやかましなく云ふのは、月友もヤツバリわからない謎ですもの、しかし世間の學者や博士方は面倒に考へ過ぎては居りやしませんでせうか『雀が石の鳥居をふみおつた』

星はよくもく、無始の初めより因縁生の本體を悟り三世十方を貫き其靈光を放ちて居る彼れは吾れ三十歳のいまに至るまで生老病死と四苦と八苦とを恐れず無我に大活動を繼續して眞理の如く働いて居る。考へ來れば昨曉の彼も今の彼れも昔の彼も又昔の彼れも彼れも受けたる因縁生の如く最善に光明を放ちて居る。嗚呼我れもまた因縁生だ彼の如く無我に大活動をなすべきである大に靈光を放つべきである、因果によりて生れ因縁によりて死するのである、心配は無用だ而して此の因果因縁の道理を最も善く活用し最も善く發揮し成就するが三世諸佛の本領である。彼れは常住不斷絶間なく彼れとして最善に活動する有様は敬服の外はない、是れ彼れの本來の眞面目である。正覺とは彼れの如く最も善く善道に本來面目の如く活動すべきを云ふのである、是れ成佛の姿ではある

まゝか

お、山よ彼は因縁生である故に大中小に従ひその高く聳ゆるは彼れの本能を發揮せる靈光である即ち成佛の姿ではあるまいか。あ、川よ其の因縁に應じ海に向て低く流るゝは即ち川の靈光にして成佛の姿ではあるまいか、三界六道の鳥類畜類も然りである、草木國土も然りである實に有情非情同時成道でないものはない。吾れは教えん乎三世因果の道理とす二因縁の教とを吾は説かんか四苦を離るゝために四聖諦の教を或は八苦を離るゝために八正道の妙説を是れ佛陀世尊の最初の御考であらうぞと恐察し奉る、實に恐れ多いことでありませす。されば吾々人類は世尊の御教に従ひ必竟空の心の裡に眞如明月の光を賞し信心の法海に菩提の影を浮ぶべきである、貴き佛心印はコ、である即今暫く問ふ

明星の靈光「眞孝は孝を忘れ眞忠は忠を忘る」金鷄勳章のために勤むるは眞忠にあらざ虚名を得んがための孝養は眞孝にあらずいまだ假りに家庭について云はば萬事忠實に勤むるが家庭の靈光である、主人も然り下男も然り奥様も然り下女も然り旦那も然り小僧も然りてあるまづ身を修め心を修め實踐躬行農工商士各々家庭に靈光を放つべきである是れ成佛の姿てはあるまいか古語に曰く家業即佛法或は世法即佛法堂に他あらんや要は脚下より常に靈光を放つべきである勿論靈光を放つべき性質のものである、是れ佛陀世尊の心佛衆生に對する一大覺醒であらねばならぬ常濟大師は斯の如く頌出せられた。

一枝秀出老梅樹 荆棘與時築看來。

今月友は新體詩に譯出しました。

老梅香あり色もあり

一枝高く秀てけり

いばらからたち色もあり

香もあり春のあさぼらけ

心佛衆生色もあり

香もあり六道の夕まぐれ

世尊は最初に於て波羅奈に説法を初められ八十歳の御時に入滅せられた其中間四十九年三百六十餘會の説法があつた而して或時靈鷲山の説法の因み是れ眞の大説法なりとて金波羅華と云ふ一枝の華を拈出せられ、揚眉瞬目とて眼を動かして居られたのみだ、八萬の大衆は驚きの目を以て眺めて居た摩訶大迦葉

は思はずニツコと笑はれた、世尊の玉はく「我に正法眼藏涅槃妙心あり摩訶迦葉に附屬す」と。これは吾が誠の悟りの花はいま大迦葉に與えると云ふ程の意味でせう。是れ名高い拈華微笑の御話であります内の解説ですが明星の説の如くてす唯だ品物が變るばかりです今一度説いて見ましやうか止めましやう、併し折角だからうまく説きませう、「泥中の蓮の如し」蓮に菊の花を咲かせてはいけません斯く考察し來れば百草頭上無限の春です、松は吹く説法度生の聲、柳は染む觀音微妙の相、溪聲廣長舌山色清淨身の様子が自得できたてしよう「アラ髮結ひの帳面です乎」また謎ですかもう當分解きません、去らば御寺の和尚さんの法語のまねをして「咄」「露」「漸」

○

第一祖摩訶迦葉尊者姓は姿羅門天竺の人で富める長者である、多子塔前に始めて釋迦牟尼佛に遭ひ奉り出家して弟子となり、十二頭陀を修行せられ道徳圓滿せられた。去れば世尊は處々の説法の會座に於ても常に半座を分ちて與へられ、敬意を表せられた程の人である。而して靈山會上の法座の時、世尊は拈華瞬目せられ迦葉は破顔微笑せられた。常濟大師は如是に記述せられた聖語を重するために以下譯出することゝした。

摩訶迦葉尊者因に世尊拈華瞬目す、迦葉破顔微笑す、世尊曰く吾に正法眼藏涅槃妙心あり摩訶迦葉に付屬す、云々

月友曰（近前來々々々親しく相見せん）

○

第二祖阿難尊者は天竺王舍城の人である、世尊の徒弟で世尊成道の夜生れたと云ふことです、容顏端正多聞第一世尊に侍者たること二十年、迦葉に侍者たること二十年、而して一切の經を暗誦し世尊一代の行化を識得するも未だ佛法の深源を了得することが出来ません。ソコデ箇様なる問答の下に大悟せられた常濟大師記して曰く（以下常濟大師云々の語を省く）

阿難陀尊者迦葉尊者に問うて曰く、師兄世尊金爛の袈裟を傳ふる外箇の什麼をか傳ふ迦葉阿難と召す、阿難應諾す、迦葉曰く門前の刹竿を倒却せよ阿難大悟す。云々

月及曰く（脚下を照顧せよ）

○

第三祖商那和修尊者は天竺マドラ國の人である、優留茶林に生れ、雪山に修行して仙人の仲間入りをなせるものなり、後阿難尊者の弟子となり、一大事修行中佛滅後一百年の頃右の如き因縁にて證悟せり。

商那和修尊者阿難尊者に問ふ、何物か諸法本不生の性なる阿難、和修、の袈裟の角を指す。又問ふ何物か諸佛菩提の本性なる阿難又和修の袈裟の角を取りて引く時に和修大悟す。

月友曰く（汝の心中にありて靈光を放てり見るべし）

○

第四祖優姿毬多尊者は天竺忉利國の人である。姓は首陀、十五歳より和修尊者に參じ、十七歳にして出家し、二十二歳にして阿羅漢果を得たり。即ち聲聞

緣覺の位に入つたのである、然れども是れ自利を知り未だ利他の大道を知らず是れ此の因縁ある所以である。

優姿惣多尊者和修尊者に執事たること三載遂に落髮して比丘となる。尊者因に問て曰く汝が身の出家か心の出家耶、師曰く實に是れ身の出家なりと、尊者曰く諸佛の妙法豈に身心に拘はらんや師即ち大悟す。云々
月友曰く身心一如靈光大千に輝く。

第五祖提多迦尊者は天竺摩迦陀國の人である、尊者第四祖に隨從して修行す四祖或時偈を説て曰く『我が法を汝に傳ふ、當に大智慧を現すべし、金日屋より出て天地に照耀す。』尊者卒に出家を求む四祖問うて曰く汝出家を志求す、身

の出家か心の出家かと尊者曰く我來りて出家を求む身心のためにあらず、四祖曰く身心のためにせざれば復た誰か出家する。云々

提多迦尊者曰く出家は我々なきが故に我々所なきが故に即心不生滅の故に即ち是れ常道なり。諸佛も常道なり心形相なし、其の體亦然り惣多曰く汝が當に大悟して自心通達すべし師乃ち大悟す。

月友曰く佛道は口耳の學にあらず、更に不傳の妙ある實參實究すべし。

第六祖彌遮迦尊者は中印度の人である。八千の仙人の長者たり、一日、衆を率ひて提多迦尊者を禮せり、曰く吾れ昔し師と同一梵天にて阿和陀仙より仙法を受く、師は禪和を修し吾は外道を學ぶ、今邪を捨て正に歸し以て佛乘に入ら

んとす。願くば和尚慈悲我をして解脱せしめ玉へよ、時に尊者出家受具せしむ餘の仙衆初めより我慢を生ず、尊者大神通を示す、此に於て俱に菩提心を發して一時に出家す、八千の仙衆共に八千の比丘とならんとす。時に左の因縁あり。彌遮迦尊者五祖因に示して曰く、佛言く仙を修し小を學するは繩の牽挽するに似たり汝自知すべし、若小流を棄つれば頓に大海に歸す、當に無生を證すべし師聞て契悟す。

月友曰く因縁熟する時是の如し正に消極を捨て積極に進むべし、連天秋水の深きあるも春月朦朧のうれしきに加かず。

第七祖婆須蜜多尊者は北印度の人である、姓は頗羅墮、常に淨衣を服し手に

酒器を持して闇重に遊行し或は吟し、或は嘯く人之を狂と謂ひき、姓名を顯はさす、然るに彌遮迦尊者遊化して北天竺國に至るに金色の祥雲起るあり、尊者徒衆に謂て曰く、是れ道人の氣なり、是れ必ず大志ありて吾が法嗣たらんと、言未だ了らざるに師即ち到り乃ち問うて左の因縁あり。

婆須蜜多尊者酒器を彌遮迦尊者の前に置き作禮して立つ、尊者問て曰く、是れ我が器となさんや是れ汝が器となさんや、師思惟す。尊者曰く、是れ我れの器とせば汝の本有の性なり若し復た汝が器ならば我が法汝が當に受くべし師聞て大に無生の本性を悟る。云々

月友曰く彼我兩頭を離れて如何と見よ本有の佛性は靈光を放てり、霜曉の鐘撞くに從て響くが如し。

第八祖佛陀難提尊者はカモラ國の人である。性は瞿曇氏頂上に肉髻あり
 辨捷無礙なり第七祖婆須蜜多尊者行化して迦摩羅國に至り、廣く佛事を興す。
 師寶座に於て自ら謂へらく我が名は佛陀難提今師と論義せんと、左の因縁あり。
 佛陀難提尊者七祖婆須蜜多尊者に値て曰く今來て師と論義せん、尊者曰く、
 仁者論せば即ち義ならず、義は即ち論せず、若し論議せんと擬せば終に義の
 論にあらず、師尊者の義の勝れたるを知りて無生の理を悟る。云々
 月反曰く鹽の味を知らんと欲せば先づ自ら嘗むべし、佛性の靈光は論義を
 超絶す。

○

第九祖伏駄蜜多尊者は提伽國の人である。姓を毘舍躍と云ふ、佛陀難提行化
 して提伽國城の毘舍躍が家に至る、舍上に白光あり上騰するを見る、其徒に謂
 て曰く、此家に當に聖人あり口に言説なし真に大乘の器なり足地を踏まず觸穢
 を知るのみ、則ち是れ吾が嗣ならん、言ひ訖るに長者出て禮して問ふ何の須む
 る所ぞ、尊者曰く、我れ侍者を求む長者曰く、我に一子あり年已に五十口未だ
 曾て言はず、足未だ曾て履まず尊者曰く、汝の説く所の如んば真に吾が弟子な
 りと、尊者之に見えて是の如く云ふを聞き、師即ち遽に起ちて禮拜して偈を説
 きて相問うて曰く『父母は我が親しきにあらず、誰か是れ最も親き者ぞ、諸佛
 は我が道にあらず、誰か是れ最も道なる者ぞ』尊者偈を以て答ふ。
 伏駄蜜多尊者佛陀難提の汝か言と心と親し父母も比すべきにあらず、汝か行

と道と合す、諸佛の心即ち是れなり、外に有相の佛を求めば汝と相似す汝が本心を知らんと欲せば合にあらず離にあらずと説くを聞き師乃ち大悟す。云々

月友曰く合離を超越して瞑目一番せよ自己の光明蓋天蓋地なり。

第十祖婆栗濕縛尊者は中印度の人である。或は脇尊者とも云ふ本名は難生なり、初め師將に誕せんとす、「父夢むらく一つの白象背に寶座あり、座上に一つの明珠を安んず、其の光四衆を照す」と。夢醒めて遂に生る、伏駄蜜多尊者中印度に至て行化せり、時に長者香蓋と云ふものあり一子を携へて來り尊者を瞻禮して曰く此子處胎六十歳因て難生と號す復た曾て一仙人に會せり、彼れ曰く

此子凡にあらず、當に法器たるべし、今尊者に遇ふ當に出家すべし尊者爲めに落髮授戒せしむ、時に八十歳なり、前後合せて一百四十歳なり。師三年一睡せず遂に悟道す。

脇尊者伏駄蜜多尊者の左右に執侍すること三年、未だ嘗て睡眠せず、一日尊者修多羅（大乘受）を誦し及び無生の理を演ず、師聞て悟道す。云々

月友曰く一百四十の老修行者あり三年眠らずして佛道を成す、今人何ぞ勉めざるべき。

第十一祖富那夜奢尊者は天竺華氏國の人である。姓は瞿曇氏なり、父を寶身と云ふ、脇尊者初め華氏國に至り一樹下に憩ふ、右の手に地を指し衆に告て曰

く此地金色と變せば當に聖人ありて入會すべし、言ひ訖つて即ち地金色と變ず時に長者の子の富那夜奢と云ふものあり、合掌して立つ、尊者師の意を知り出家せしめ戒法を具せしむ。

富那夜奢尊者合掌して脇尊者の前に立つ、尊者問うて曰く汝が何れより来る、師曰く我心住にあらず、尊者曰く汝何れの處にか住す、師曰く我心正にあらず、尊者曰く汝が不定なる乎、師曰く諸佛も亦然り、尊者曰く汝が諸佛にあらず、諸佛と云ふも亦非なり、師此言を聞き三七日を経て修行し無生法忍を得て尊者に告げて曰く諸佛立非なり、尊者にもあらず、尊者聽許して正法を付す。

月友曰く凡聖彼我の風つきて春海月の圓かなるあり、是れ無生法忍の姿に

あらずや。

○

第十二祖馬鳴尊者は天竺波羅那國の人である。亦功勝と名く夜奢尊者に參じ最初に此問答あり得悟す、如來記して曰く、吾か滅後六百年當に賢者馬鳴と云ふものあり、波羅奈國に於て異道を摧伏して廣く人天を度す、度人無量吾に繼て化を傳ふべしと今正に是れ其時なりと正法眼藏を付す。

馬鳴尊者夜奢尊者に問うて曰く、我れ佛を識らんと欲す、何物か即ち是なる尊者曰く汝が佛を識らんと欲せば識らざるものは是なり、師曰く佛既に識らざるば焉んぞ是なることを知らん、尊者曰く既に佛を知らず、焉んぞ是なるを知らん師曰く此は是れ鋸の義なり、尊者曰く彼れは是れ木の義なり、復た

問ふ木の義とは何ぞや、尊者曰く汝我に解せらる、師默然として省悟す。

月友曰く鋸りびきはだめであります、木頭の如く露柱の如く徹底無心なるべし清涼の月必竟空に遊ぶが如し。

○

第十三祖迦毘摩羅尊者は天竺華氏國の人である、初め外道たりし時徒三千あり、諸の異論に通ぜり、馬鳴尊者華氏國に於て妙法輪を轉ず、忽ち獨の老人あり、座の前にて地に仆る、尊者衆に謂て曰く、これ庸流にあらず當に異相あるべし、言ひ訖りて則ち見えす、又俄に地より一りの金色の人涌出し、復た化して女子となる、右手に尊者を指して偈を説て曰く「稽首す長老尊當に如來の記を受くべし、今此地上に於て第一義を宣説せよ」と偈を説き訖りて見えす、尊者

者曰く將に魔あり來りて吾に力を校せんとす。魔遂に本形に復して禮を作して懺悔す、尊者問うて曰く汝誰とか名くるや、眷屬多少ぞ、答て曰く我を迦毘羅と名く、三千の眷屬あり、神力を盡して變化せんこと如何、曰く、我れ巨海を化して極めて小事となす、尊者曰く汝性海を化し得てんや否や、曰く何をか性海と謂ふ我未だ嘗て知らず、尊者即ち爲めに性海を説く。云々

遮毘摩羅尊者因に馬鳴尊者佛性海を説きて曰く、山河大地皆な依て以て建立す、三明六通茲に由て發現す、師聞て深悟す。

月友曰く法性海の風光は神力外道の知る所にあらず、前三々後三三。

○

第十四祖龍樹尊者は西天竺國の人である、龍猛亦是龍勝と名く、十三祖當時

受度傳法して西印度に至る、彼に太子あり名を雲自在と云ふ尊者の名を仰ぎて宮中に請して供養す、尊者曰く如來教あり、沙門は國王大臣權勢の家に親近することを得ざれと、太子曰く我國城の北に大山あり、山中に一の石窟あり、師此に禪寂すべきや否や、尊者曰く諾、即ち彼の山に入り龍樹及び五百の龍衆を度し俱に具戒を受けしむ然しより龍樹尊者に従ひ四年を経たるに龍王十三祖を請して法を聞く龍王如意珠をたてまつる。

龍樹尊者因に十三祖龍王の請に赴きて如意珠を受く、師問うて曰く此珠世中の至寶なり是れ有相なりや、無相なりや、祖曰く汝只た有相無相を知りて此珠有相にあらず、無相にあらざるを知らず、師聞て深悟す。

月友曰く兩頭共に不是高く眼を著くべし。

○

第十五祖迦那提婆尊者は南天竺の人である、姓は毘舍羅、初め福業を求め兼て辯論を樂む、龍樹尊者得法行化して南天竺に到る、彼の國の人多く福業を信ず、尊者ために妙法を説くを聞て遙に謂て曰く、人に福業ある世間の第一なり徒に佛性を言ふ誰か能く之を試みん、龍樹曰く汝が佛性を見んと欲せば先づ須く我慢を除くべし、彼の人曰く佛性は大か小か龍樹曰く佛性は大にあらず、小にあらず、廣にあらず、狹にあらず、福なく報なく死なく生なし、彼れ理の勝れたるを聞く悉く初心を廻す、其の中に大智慧迦那提婆あり龍樹大士に謁して左の相見あり。

迦那提婆尊者龍樹大士に謁す、將に門に及ばんとす、龍樹是れ智人なりと知

り先づ侍者を遣はして滿鉢の水を以て座前に置く尊者之を觀て即ち一針を投じて而して之を進む相見欣然として契會す。

月友曰く滿鉢の水針に破れず法性真如の月、聲色の侵すべきなし。

第十六祖羅睺羅多尊者は天竺迦毘羅國の人である、十五祖行化して迦毘羅國に到る、彼れに長者あり梵摩淨徳と云ふ一日園樹に大耳を生ず菌の如くにして味甚だ美なり、唯だ長者と第二の子羅睺羅多と取りて之を食す、取り己れは隨て長す盡して復た生ず、自餘の親族皆な見る能はず、時に迦那提婆尊者其の宿縁を知りて遂に其家に至る、長者その故を問ふ尊者曰く汝が家に昔し曾て一比丘を供養す、彼の比丘然も道眼未だ明ならず虚しく信施に需ふを以ての故に報

るに木菌となれり、惟だ汝と子と精誠に供養せしかば以て之を享くることを得たり餘は即ち否らず矣。又問ふ長者年多少ぞ答て曰く七十有九尊者乃ち偈を説て曰く「道に入りて理に通ぜず、身を復びして信施を還す、汝年八十一此樹耳を生ぜず」長者偈を聞いていよく歎服を加ふ且曰く弟子衰老せり師に事ふること能はず、願くば次子を捨て師に隨ひ出家せしめむ、尊者曰く昔し如來此の子を記し玉ふ當に第二の五百年に大教主たるべし、今相遇ふ蓋し宿因に符合せり即ち剃髮して第十六祖に列せり。

羅睺羅多尊者迦那提婆に執侍す宿因を聞て感悟す。

月友曰く因果應報鏡の如し大耳菌の因縁以て鑑となすべし。

第十七祖僧伽難提尊者は室羅筏城寶莊嚴王の子である、生れて能く言ふ、常に佛事を讚す七歳即ち世樂を厭ひ偈を以て其父母に告て曰く「稽首す大慈悲父和南す骨血の母、我今出家せんと欲す、幸に願くは哀愍の故に」父母固く之を止む遂に終日食せず、乃ち其家に在ての出家を許す、僧伽難提と號す、復た沙門禪利多に命じて之が師とならしむ、十九載を積んで未だ曾て疲倦せず師常に自ら念言すらく身王宮に居す、胡ぞ出家とせん、乃ち迷れて一禪窟に入り十年を経たり然れども人知るものなし、羅睺羅多尊者行化して室羅筏城に到る、河あり名けて金水と云ふ其味殊に美なり中流に復た五佛の影を現す尊者衆に告げて曰く此河の源凡そ五百里聖者僧伽難提と云ふものあり、居せり、佛記し王へり一千年の後當に聖位を紹ぐべし、語り訖つて諸の學衆を領じ流に沂て上

る、彼の處に至り見れば僧伽難提入定せり尊者衆と共に之を伺ふ三七日を経て方に定より起つ、問答數番遂に師問て曰く仁者何の聖を師として是の無我を得たる尊者曰く我れ迦那提婆大士を師として此の無我を證す、師曰く稽首す提婆師、而も仁者を出す、仁者我無きが故に我れ仁者を師とせんと欲す、尊者答て曰く。云々

僧伽難提尊者因に羅睺羅多偈を以て示して曰く我れ已に無我たるが故に汝須く我の我を見るべし、汝が既に我を師とす我の我の我にあらざるを知る師聞て心意豁然として即ち度脱を求む。

月友曰く四大悉く我にあらず、五蘊固より有にあらず、無我の靈光は無我寂靜の中にあり、徹照すべし。

○ 第十八祖伽耶舍多尊者は摩提國の人である。姓は鬱頭藍、父を天蓋と云ひ母を方聖と云ふ嘗て夢むらく大神鑑を持すと因て娠むことあり凡そ七日にして誕る肌體瑩として瑠璃の如し未だ嘗て洗浴せざるに自然に香潔なり、僧伽難提尊者行化して摩提國に到る忽ち涼風あり衆を襲ふ、身心悦適すること常にあらず而して其の然る所以を知らず、尊者曰く是れ道德の風なり、當に聖者ありて出世して祖燈を嗣續すべき乎と言ひ訖り一峰の下に到り又衆に謂て曰く此峰頂紫雲あり蓋の如し聖人之れに居せん即ち大衆と徘徊すること久し山舎を見るに一童子圓鑑を持するあり、直に尊者の前に至る、尊者問て曰く汝が手中の者當に何の所表ぞ童子曰く諸佛の大圓鑑なり内外瑕翳無し兩人所見同じく心眼皆相似

たり父母子の語を聞いて即ち出家せしむ、尊者携へて本所に至り具戒を受けしめ伽耶舍多と名く或時風、殿堂の銅鈴を吹く、聲を聞き左の因縁あり。

伽耶舍多尊者僧伽難提尊者に執侍す、有る時風殿の銅鈴を吹くの聲を聞き、尊者師に問て曰く鈴鳴る耶、風鳴るや師曰く風にあらず、鈴にあらず、我心鳴るのみ、尊者曰く善哉々々吾が道を繼ぐ者は子にあらずして誰ぞと即ち法藏を付す。

月友曰く心境寂靜の故に心境俱に鳴る之れ心の鳴るのみ、邪解に落在する勿れ。

○ 第十九祖鳩摩羅多尊者は天竺月支國の人である、姓は婆多門十八禪化度して

月支國げつしこくに到いたる一婆羅門はらもんの舎しやに異氣いきあるを見て尊者そんじや將まさに彼の舎しやに人ひとらんとす、師し問とうて曰いはく師しは是これ何なんの徒とぞ尊者そんじや曰いはく是これ佛弟子ぶつでしなり、師し佛號ぶつがうを聞きて心神しんしん悚然しょうぜんとして即そく時に戸とを閉とづ尊者そんじや良久りやうきやうして其門そのもんを叩たく師し曰いはく此舎このしやに人ひと無し尊者そんじや曰いはく無なと答こたふる者は誰たれぞ、師し語ごを聞きて是これ異人いじんなりと知しり關くわんを開ひらいて延接えんせつす、尊者そんじや曰いはく昔むかし世尊せそん。云々うんぬん

鳩摩羅多尊者きゅうまらたそんじや、因ちよみに伽耶舍多尊者かやせたそんじや示しめして曰いはく吾わか滅後めつご一千年いっせんねん大士だいしあり月支國げつしこくに出現しゆげんして玄化げんけを紹隆せうりやうせんと今汝いまなんち吾われに値あふ、斯かの嘉運かうんに應おうぜり、師し聞きて宿命智めいぢを發はつす。

月友げつゆう曰いはく本來ほんらい不變ふへんの自性じじやう、聖凡しょうぼん迷悟めいごなし但たた虛明きよめい一片いっぺんにして廊落くわくらく無際むくわいなり是れ宿命智めいぢなり舊時きやうじの漢かんなり。

○

第二十祖たいにそ闍耶多尊者せつやたそんじやは北天竺國きたてんぢくこくの人ひとである、智慧ちゑ廣大こうだいにして化けは無邊むへんなり當時たうじ中印度ちゆういんどにて十九祖じゅうくに逢あて問とうて曰いはく、我家わがいえの父母ふぼ素もとより三寶さんぼうを信しんずれども而しかも嘗かつて疾癘しつらいに縈まはる凡おほそ營作えいさくする所皆ところみな不ふ如意にじやういなり、而しかして我わがが隣人りんじん久ひさしく旃陀せんた羅らの業げふをなす、身常みつねに勇健ゆうけんにして所作しよさ和合わがふす、彼かれ何なんの幸かうあつて而しかして我わがれ何なんの辜つみかある、尊者そんじや曰いはく何なんぞ疑うたか足たらんや且かつ善惡ぜんあくの報むくいに三時さんじあり凡おほそ人恒ひとつねに仁じんは矢やに暴はうは壽じゆ、逆ぎやくは吉義きちぎに凶きやうなるを見みて便すなはち謂いへり因果いんぐわなく罪福ざいふくなしと殊ことに知らず、影響えいさう相隨さうずいふこと毫釐ごうりも惑まどふことなく、たとへ百千萬劫ひゃくせんかうせつを経よるも亦また磨滅まめつせず、因緣いんねん必かならず相値さうぢふことを、時ときに師是しこの語ごを聞きき已いとりて頓とんに疑うたかを釋とく尊者そんじや曰いはく云々うんぬん

闇夜多尊者因に十九祖示して曰く、汝已に三業を信ずと雖も而も未だ業は惑より生し惑は識に因て有り識は不覺に依り不覺は心に依るを明めず、心は清淨なり生滅なく造作なく報應なく勝負なく寂々然たり、靈々然たり汝若し此の法門より入らば諸佛と同じかるべし矣、一切善惡有爲無爲皆夢幻の如し師聞て言を承けて旨を領じ即ち宿慧を發す。

月友曰く參禪の士萬事を放下し諸縁を休息し善惡を思はず鼻端に眼をかけた本心に向つて見よ一心寂たる時諸相盡きて根本の無明破る豈に枝豎の業報をのみ論ぜんや。

第二十一祖婆須盤頭尊者は天竺羅閱城の人である、性は毘舍佉、父を光蓋と

云ひ母を嚴一と曰ふ家富んで子なし父母千佛塔に禱りて生る第二十祖闇夜多尊者行化して羅闍城に至り頓教を敷揚す、此の所に學衆あり唯だ辯論を尙ぶ之首たる者を婆須盤頭(此に編)と名く常に一食にして臥せず六時に佛を禮す、清淨無欲にして衆の爲めに歸依せらる、尊者將に之を度せんと欲し、先づ彼の衆に問うて曰く此徧行頭陀能く梵行を修す、佛道を得べけんや、衆曰く我師精進なり何か故ぞ不可なる、尊者曰く汝が師は道に遠し矣、設ひ苦行して塵劫を歴るも皆な虛忘の本なり、衆曰く尊者何の德行を蘊んで而も我師を譏る、尊者曰く我が道を求めず。云々

婆須盤頭尊者因に二十祖曰く、我れは道を求めず亦顛倒せず、我れは佛を禮せず亦輕漫せず、我れは長座せず亦懈怠せず我れは一食せずまた雜食せず我れは足るこ

とを知らず、また貪欲せず心に求むる所なし、之を名けて道と曰ふ時に師聞
已りて無漏智を發す。

月友曰く持齋梵行、禮佛誦經、道眼より見來れば固より空華の如し然れど
も本源を識得せる那一人ならばまた是れ好風流の分あり。

○

第二十二祖摩拏羅尊者は那提國常在王の子である、年三十にして婆修祖師に
遇ふ。婆修盤頭尊者行化して那提國に到る、彼の王を常自在と名く二子あり一
を摩訶羅と名け次を摩拏羅と名く王尊者に問て曰く羅闍の風土と此の所と何ぞ
異なる、尊者曰く彼の土は三佛出世す、今王の土は二師ありて化導せり、曰く
二師とは誰ぞ、尊者曰く佛記し玉へり第二の五百歳に一りの神力大士あり出家

して聖を繼ぐと即ち王の次子摩拏羅是れ其一なり、吾れ德薄しと雖も敢て其の
一に當る、王の曰く誠に尊者の言ふ所の如くんば當に此の子を捨て、沙門と作
すべし尊者曰く善哉大王能く佛旨に遵ふと即ち與に、受具せしむ有る時師問て
曰く。云々

摩拏羅尊者婆修盤頭に問て曰く何物か是れ諸佛菩提なる、尊者曰く心の本性
即ち是なり師又曰く如何なるか是れ心の本性尊者曰く十八界空是なり、師聞
て開悟す。

月友曰く問答明白、必竟空の眞理味ふべし偏空頑空に落在するなくんば佳
なり。

○

第二十三祖鶴勒那尊者は月支國の人である姓は婆羅門、父は千勝母は金光と云ふ子なきを以ての故に七佛金幢に祈りて生る、二十二才にして出家し三十にして摩羅尊者に遇ふ、師尊者に問て曰く我れ何の因縁有りてか鶴衆を感ず尊者曰く汝が第四劫の中に嘗て比丘となり龍宮の法會に赴くに當り汝が諸の弟子夙な隨從せんと欲す、汝五百の衆中を見るに一人の妙供に堪任するあるなし時に諸子曰く師常に說法す食に於て等なるものは法に於ても亦等なりと今既に然らず何の聖と云ふことあらん、汝即ち法會に赴かしむ、汝生を捨て生に赴くも諸國を轉化せしより其五百の弟子福徳に徳薄きを以て羽族に生じ今汝の慧を感ずる故に鶴衆となりて相隨ふ、師語を聞き曰く何の方便を以てか彼等をして解脱せしめん。云々

鶴勒那尊者因に摩羅尊者示して曰く我に無上の大法寶あり、汝當に聽受して未來際を化すべし師聞て契悟す。

月友曰く大正聖代の士此の因縁により食法兩頭の見を離れ決して名字有相に縛せらるべからず。御用心々々

第二十四祖師子尊者は中天竺の人である姓は婆羅門本と異道を學して博達強記なり、後ち二十三祖に參じて今の問答あり直に無所用心の所に當て頓に佛慧に入る、時に二十三祖忽ち東北を指して問て曰く是れ何の氣象ぞ師曰く我れ氣象を見るに白虹の如くにして天地を貫く復た黒氣五道あり横に其中に亘る、祖曰く其兆如何師曰く知るべきなし、祖曰く吾れ滅後五十年北天竺に當に難起る

あるべし嬰て汝が身にあらん、是の如くなりと雖も汝吾法寶を傳持して未來際を化すべし師此の密記を受け東北罽賓國に行化し法嗣婆舍斯多を接し遂に外道の難にかゝり王のために蘊空を説き從容自在として其頭を斷らる。

師子尊者二十三祖に問て曰く我れ道を求めんと欲す當に如何か用心すべき祖曰く汝若し道を求めば用心する所なし師曰く既に用心なし誰か佛事を作さん祖曰く汝若し用ふることあらば即ち功德あらず、汝若し作すことなき即ち佛事なり、經に曰く吾が作す所の功德は而も我所なきが故に、師是の言を聞き已りて即ち佛慧に入る。

月友曰く道を求めんと欲し心を用いんと欲するは一波生して萬波起るの理なり即ち眞の功德にあらず、道は無作の往來に存す。

○

第二十五祖婆舍斯多尊者は天竺罽賓國の人である、姓は婆羅門、父は寂行母は常安樂と云ふ、初め母神劍を得ると夢む因て孕むあり生る、師子尊者遊方して罽賓國に到る婆利迦と云ふ者あり本より禪觀に習へり、故に禪定と知見と執相と捨相と不語との五衆を有せり、尊者既に五衆を接化し名遐邇に聞ゆ、法嗣を求むるに當り一人の長者に遇ふ其子を引いて尊者に問て曰く此子斯多と名く生るゝに當て便ち左の手を拳ぎる今既に長ぜり而も終に未だ舒ること能はず願くは尊者其宿因を示し王へ尊者之を觀て即ち手を以て接して曰く我に珠を還すべし、童子遽かに手を開きて珠を奉る、衆皆な驚異す、尊者曰く吾れ前報に僧と爲る、時に童子あり婆舍と名く吾れ嘗て西海の齊に赴き眞珠を受けて之

に附す今吾れに珠を還す理固に然り、長者遂に其子を捨て出家せしむ尊者即ち與に受具せしめ前縁を以ての故に婆舍斯多と名け終に嗣續す。

婆舍斯多尊者因に二十四祖示して曰く如來の正法眼藏今汝に轉附す汝應に保護して普く來際を潤すべし師宿因を顯發し密に心印を傳ふ。

月友曰く前世の婆舍今世の斯多是れ同乎是れ別乎別々不別了了了。

○

第二十六祖不如蜜多尊者は南印度得勝王の太子である、二十五祖始め中印度の無我尊外道を降伏し、即ち南印度に到る、時に彼の國王を天徳と名く迎へ請して供養す、天徳崩じ太子徳勝位に即き、外道を信じて難事を二十五祖に致す太子に不如蜜多進諫せるを以て囚はる、王遽かに祖に問うて曰く予か國素より

妖怪を絶す、師傳ふる所の者は當に是れ何の宗なるべき。祖曰く王の國昔しよりこのかた實に邪法無し我が傳ふる者は即ち是れ佛宗なり王の曰く佛滅して已に千二百歳なり、師は誰に從て得るや祖曰く飲光大士親しく佛印を受け展轉して二十四世師子尊者に至る我れ彼れより得たり、王曰く予れ聞く師子比丘は刑戮を免るゝこと能はずと何ぞ能く法を後人に傳へん、祖曰く我師難未だ起らざるとき蜜に我に信衣法偈を授けて以て師承を顯はす、王の曰く其衣何れにある、祖即ち囊中に於て衣を出して王に示す、王命じて之を焚かしむ五色相鮮にして薪盡きて故の如し、王即ち追悔して禮を致す、師子の眞嗣なること既に明かなりければ乃ち太子を赦す、太子遂に出家を求む祖、太子に問て曰く云々不如蜜多尊者太子の時二十五祖問うて曰く汝出家せんと欲す當に何事をかな

すべき、師曰く我若し出家せば別事をなさず祖曰く何事をかなさざる、師曰く俗事をなさず、祖曰く當に何事をかなさすべき、師曰く佛事をなすべし祖曰く太子の智慧天至なり必ず諸聖の降迹ならん。

月友曰く俗事をなさず佛事をなすの消息は生相なく滅相なく煩惱なく涅槃なく廓然として空の内外なきが如く清淨にして水の表裏なきか如けん。

○

第二十七祖般若多羅尊者は東印度の人である、時に不如蜜多東印度に到る彼の王を堅固と名く外道を奉じて長瓜梵志を師とす、尊者將に至らんとするに及んで王、梵志と同く白氣の上下を貫くを見る、王曰く斯れ何の瑞ぞや、梵志豫め尊者の境に入るを知りて王の善に遷らんを恐れ、乃ち曰く此は是れ魔の來ら

ん兆のみ何の瑞か之れあらん、既にして徒衆を鳩めて議して曰く、不如蜜多將に都城に入らんとす誰か能く之を挫かん、弟子曰く我等各咒術あり以て天地を動かし水火に入りつべし何をか患んや、尊者至て先づ宮牆に黒氣あるを見て乃ち曰く小難のみ直に王の所に詣る、王の曰く師來て何をかなさん、尊者曰く將に衆生を度せんとなす、曰く何の法を以てか度せん、尊者曰く各々其類を以て之を度せん時に梵志言を聞て其怒りに勝へず、即ち幻法を以て大山を尊者の頂上に化出す尊者之を指す忽ち彼の衆の頭上にあり梵志等怖懼して尊者の哀を乞ふ尊者其愚惑を感れんて再び之を指す、化山隨て滅す乃ち王のために法要を演説して眞乘に趣かしむ、又王に謂て曰く、此の國當に聖人ありて我に繼ぐべし是の時、婆羅門の子あり二十許、幼より父母を失ひ名氏を知らず、或は自ら瓔珞

と云ふ、故に人之を瓔珞童子と呼ぶ閭里に遊行し空しく日を渡る常不輕菩薩の類の如し、人、汝行くこと何を急なると問へば即ち答て曰く汝何ぞ慢なる或は何の姓ぞと問へは乃ち曰く汝と同姓なりと、人其故を知るなく、後に王尊者と車を同ふして出づ瓔珞童子前に稽首するを見る、尊者曰く汝往事を憶ふや否や。

般若多羅尊者因に二十六祖曰く汝往事を憶ふや否や師曰く我遠却の中を念ふに師と同居せり、師は摩訶般若を演じ我は甚深修多羅を轉ず、今日の時昔因に契へり。

月友曰く色清淨なれば一切智清淨なり異もなく別もなく衆生即佛性佛性即衆生、誰か汝と同居せざるものあらん。

〇

第廿八祖菩提達磨尊者は南印度香至王の第三王子である、姓は刹帝利種なり本は菩提多羅と名く、七才にして四韋陀五明集を知り法を慕ふて後三藏に通じ尤も定業に工なり。時に廿七祖般若多羅尊者行化して彼れ香至王の所に到る王固より奉佛の徒なり、故に尊重供養無價の寶珠を以て施物となす。

そこで廿七祖三王子の智慧を試みんと欲し此の寶珠を以て示す曰く此珠圓明なり世復た此珠に加ふるものありや、長子月淨多羅曰く此珠は最上にして七寶中の尊なり世固に之に勝るものなし、吾が王家にあらずんば孰か能く之を致さん、尊者の道力にあらずんば孰れか能く之を受けん。第二子功德多羅の所見も亦之と同じかりき。第三子菩提多羅は如何、曰く此の珠は世寶のみ未だ以て上

とするに足らず、諸法の中に於て法寶を上となす、此は是れ世光のみ未だ上とするに足らず、諸光に於て智光を上となす、此は是れ世明のみ未だ上とするに足らず諸明の中に於て心明を上となす此珠の光明は自ら照すること能はず智光を借りて光を辨ずるを要す既に之を辨じ了れば即ち是れ珠なることを知る、既に是れ珠なるを知れば即ち其寶なるを明らむ、若し夫れ寶なるを明むれば寶自ら寶にあらず、若し其寶なるを辨ずれば珠自ら珠ならず珠自ら珠ならざれば智光を借りて而も世珠たるを辨ぜんを要す寶自ら寶ならざれば智寶を假りて以て法寶を明らむを要す、然らば師よ其れ道ありて其寶も現はるれ、衆生道あれば心寶もまた然り。

廿七祖その辨説を聞きて聖の降誕なるを知れども天機漏すべからず、乃ち復

た問て曰く諸物の中に於て何物か無相なる師曰く不起無相なり祖曰く諸物の中に於て何物が最も高き師曰く人我最も高し祖曰く諸物の中に於て何物が最も大なる師曰く法性最も大なり、是の如く問答して師資の道相通すと雖も尙ほ機根の純熟を待てり其後父香至王病んで殂せり衆皆慟哭すること甚し、然るに菩提多羅獨り痛哭せず柩の前に於て端然默坐して入定し、七日にして出て般若多羅尊者の處に到り曰く我れ素と國位を願みず法を以て物を利せんと欲す然れども未だ其師を得ず久しく待つ所あり今尊者に遇ふて出家の志決せり願くは悲智容されよ。般若多羅尊者道縁の方に至るを知り出家受具せしむ。

師般若多羅の室に於て七日間坐禪す、尊者廣く坐禪の妙理を指説す、師聞て無上智を發す、乃ち曰く汝諸法に於て已に通量を得たり、夫れ達磨は通大の義

あり宜しく達磨と名くべし、因て號を菩提達磨と改む後ち尊者に師事する事四十年其鉗鎚を受け其鍛鍊を経て大乘の聖果圓熟し聖胎乃ち成就す、茲に於て正法眼藏の大附屬を得、二十八代の祖師となり將に人天を化益せんとす、即ち問ふ吾れ已に得法す何れの國に到りてか佛事をなすべき、尊者曰く汝得法すと雖も暫く南天に止りて吾が滅後六十七歳を待ちて正に震且に行き大法器を接すべし、汝は震且に縁深しと、師尊者の親教に従ひ南天に止まりて教化す、時に六宗の外道あり曰く有相宗、無相宗、無相宗、定慧宗、戒行宗、無得宗、寂靜宗なり是れ同く佛法内の流を汲むも要するに邪見の徒なり未了義の徒なり、達磨一々之を降伏して歸服せしめ名聲五天に高し、願れば吾兄月淨多羅は既に寂し其子異見王位に即く。是れ吾が姪なり、然るに彼れ外道の法を信じ將に國政を革

めんとす、此れ何ぞ國家に福あらんや、當に爲めに教ゆべしと、先づ無相宗より歸服せる二名匠波羅提と宗勝とを遣はさんと擬す。師思へらく宗勝辨捷にして能く論ずと雖も道力未だ足らず波羅提を以て之に充てんと、然るに宗勝自ら乞ふて許されざるに竊かに王の所に赴き問答數番將に屈せられんとす。達磨道眼を以て遙に之を知り波羅提をして雲に乗じて行かしむ、王愕然として問答を忘れ曰く空に乗するものは是れ正か邪か、波羅提曰く我れ邪正にあらず來つて邪を正となさんとす、王の心若し正ならば我れ邪正なし、王驚異するも驕慢方に熾んなり乃ち前きの宗勝を國外に逐へり波羅提曰く王既に道あらば何ぞ沙門を擯出するや、我れ解するなしと雖も願くは問を致せ異見王怒て問ふ何物か是れ佛。波羅提曰く見性是れ佛、王曰く師は見性するか、曰く我れ佛性を見る

王曰く性何れの處にかある、曰く性は作用にあり王曰く是れ何の作用ぞ、我れ今見ず、曰く今現に用あり、王自ら見ざるのみ、王曰く我に於てありや、曰く若し作用せば是ならずと云ふことあるなけん、王若し用ひずんば體も亦た見がたし、王曰く若し用ゆる時に當て幾所にか出現す、曰く世に現するが如きは當にその八あるべし即ち偈を説いて曰く

「胎にありては身たり、世に處しては人たり、眼にありては見と云ひ、耳にありては聞と云ひ鼻にありては香を辨じ口にありては談論し、手にありては執捉し、足にありては運奔す、徧現すれば、俱に沙界を該ね、收攝すれば一微塵にあり、識るものは是れ佛性なりと知り、識らざるものは喚んで以て精魂となす」

王之を聞き心即ち開悟して前非を悔謝し遂に豁然として志を變じ波羅提に従ひて法要を咨詢し、朝夕倦むなく九旬に迄べり、一日波羅提に問ふ尊者辨慧是の如し果して何人をか師とせしや、波羅提曰く我が師として出家せしは烏波三藏なりしも、我が得法出世の師は即ち王の尊叔なる菩提達磨是れなり。

玉達磨の名を聞き遽に大に駭て曰く吾叔存するか噫我れ鄙薄にして王位を嗣ぎ邪に趣き正に背き、荷負を克くせず、妄りに聖教を抑へて吾が尊叔を累せりと、速に近臣に敕して特に請迎を加へしめたり。達磨使者と與に尋て王宮に至る、王泣て拜して起つ能はず、達磨即ち爲に説法して過を悔ひしむ王大に病む、大師囚徒を大赦し宗勝を迎へまた福業を修めしめて之を救ふ、佛日再び南天に輝く、大師茲に於て本師般若多羅の教命を願ふに六十七載も將に過ぎん

とせしかばまづ般若多羅の塔廟を禮し六宗の衆徒に接見し異見王に告別して曰く「我れ震旦に於て其緣己に稔れり。今東に去らん當に善く汝の躬を持して爾の國家を保つべし」王涕て曰く余が天何ぞ祐せずして我が尊叔をして之を去らしむる、此國何の罪ありて彼の土何の祥かある、吁、縁なれば是れ止むる所にあらず、惟だ願くば早く回へられよ、是に於て王は大師のために大船を具へ實つるに衆寶を以てせり、大師はその翌日大船に入り王ひ、國王は躬ら親戚臣僚を帥めて海壖に送られたり國人之を觀て萬歳を三呼せしとなむ。

謹て史書を按ずるに當時印度の沙門は殊にヒンヅスタンのパンシアブ地方より多く道をヒシツクツシユに取り支那に布教し支那沙門亦た數年を隔て、陸續印度に入り經律を求めたりしが故に、支那の情勢は印度沙門の概聞せし所たり

しなり、パンシヤツブ地方はガンヂス河の上流にあり、ベンガル即ち東印度と相通ぜるを以て般若多羅尊者が能く支那の情勢を知りて數十年の後以て支那に布教すべきを達磨に誨へしもの亦固より怪むに足らず、而して支那人は明代永樂帝の時に至るまで航海の術に暗く、只だ陸の智識を有し陸路より西域に通ずるを知るのみなりしなれど印度人は上古より文明の程度遙かに優りたれば中古より海路一帆萬里の長風に駕しベンガル灣よりビルマアムンクマン、ニコバルス諸列島の邊を経てマラツカ海峽を過ぎマレイマラツカ半島スマトラボルネオ諸島の間を廻航して直ちに支那海に出て蕃禺(香港邊)の一角に上陸するの便あるを知れり、是れまた壯圖を懐ける老達磨の志望なりしならん、達磨大師は航路三周年に涉り梁の大通元年丁未九月二十一日蕃禺の海門に入り、欣々然とし

て直ちに廣州府に來れり吾が繼體天皇の二十一年にして西曆紀元五百二十七年なり。

廣州の刺史蕭昂は迎えて之を館せしめ主の禮を具して款待し表を上りて梁朝に以聞す。武帝表を覽て歡喜し使を遣はし詔を齎らして屈請せり、大師は十一月一日を以て海路金陵に到る。道程實に三千里即ち我が五百里餘なり、武帝はまづ法駕を迎えて大師を正殿に陪座せしめ恭敬重の禮を盡しやがて徐に問て曰く『朕嘗て寺を造り經を寫し大に僧尼を度す必ず何の功德かある』大師曰く『無功德』帝曰く『何ぞ無功德なる』大師對へて曰く此れ但だ人天の小果のみ有漏の因のみ、影の形に隨ふ如く有りと雖も實にあらず』帝曰く『如何なるか是れ眞の功德』大師曰く、『淨智圓明にして體自ら空寂なり是の如きの功德

世を以て求めず』と蓋し心地を徹照するを以て眞の功德となせしなり、帝復た更に問うて曰く『如何なるか是れ聖諦第一義』大師曰く『廓然無聖』帝曰く『朕に對するものは誰ぞ』大師曰く『不識』と帝は遂に心地の風光を解する能はず既に二頭に落在せり未だ教乘の見を脱する能はず、大師は留ること十九日にして金陵(鄴都)を去る、即ち梁の大通元年にして、魏の武泰元年なり大師は四日にして魏の境に趨き尋いて魏都洛陽に至る其の年の十二月五日前後なり。時に魏主孝明帝は胡太后に鳩殺せられ、此年四日を以て殂し爾來榮兵を擧げて孝文の姪長樂王を立て胡太后を河に沈め又孝莊帝を弑する如き擾亂の時に當りて大師は魏都に入れり、諸太夫は儒典を持して大師を試む大師曰く我れ文字を知らず但だ鼻を以て嗅き當てんと諸士乃ち論語を以て嗅かしむ曰く是れ是非

を説く文字なり』春秋を嗅がしむ曰く『血腥さし』周易を嗅がしむ曰く『是れ天書なり吾が國是れなしと雖も一音一字を以て之を亟にすと』既にして大師は亂世道の説くべきなく、教の施すべき手段なきを觀破せられたれば滯留數日遂に魏都洛陽を去り東の方嵩山に入り小室八千六百尺の削壁に對坐して九年を経玉へり、其の間道副に皮を得せしめ道育に肉を得せしめ尼總持に骨を得せしめ慧可に髓を得せしめ道風滿禹域に振へりさればにや誌公及び傳大士は大師を以て觀音大士佛心印を傳ふるものなりと謂ひ梁の武帝は書を魏に遣はして曰く『共に觀音の分化に頼らん』と魏の朝廷は之を聞き三たび詔して迎請す然れども辭して動かず、帝遂に高しとなして就て二つの摩納の袈裟と金銀の器物若干を賜ひしも皆謙遜して受けず三たび之を返す孝莊帝終に親しく之を捧げて授

け玉ふ。

魏の光統律師西域の流支三藏等あり大師の不立文字教外別傳の旗幟を見、直指人心見性成佛の法鼓を聞き而も名聲の遙かに及ばざるを知り忿怒に堪へず來りて論議すれ共また及ばず、大師は彼等のために道力もて婆心に説けども悟らず終に石を投じて當門の齒を折らしめ、毒を加ふること六回に及べり、大師六回の時毒を取りて石上に置かれければ石ために裂けたりとぞ。大師は佛心印を二祖慧可に傳へて既に本願を成就し化縁の盡きたるをしろしめしかば中毒を自ら救はんとせず端居奄然として示寂し玉へり。梁の大同元年西魏文帝の大統元年皇紀一千百九十五年、安閑天皇即位二年、西曆五百三十五年なり世壽一百五十歳にして乙卯十月五日は實に正當の命日なり其年十二月二十八日熊耳山の

吳坂に葬る。魏主は中使阿弘簡を遣はし書を駭せ梁に至て哀を武帝に告げたり
 武帝は感張すること之を久ふし詔を照明太子に下し誄文を備へて宗子諸王百官
 と共に就て奠り寶器十六事を賜ふて祭祠に充て絹百束をば賻助の禮とせり、照
 明太子誄文の略に曰く「洪に惟れば聖胄大師十方の智印を荷ふて六通に乗じ
 海に泛んで悲智梵方に運らし顛危を華土に極へり」即ち梁の武帝は聖胄大師を
 諡して塔碑を鐘山の定林寺に立て、李唐の第九主代宗皇帝は大師を仰慕して
 圓覺大師と諡し塔を立て空觀と云ふ世聖胄圓覺大師と稱す、菩提達磨尊者因に
 二十七祖般若多羅尊者問ふ諸物の中に於て何物か無相なる師曰く不起無相なり
 祖曰く諸物の中に於て何物か最も大なる師曰く法性大なり。と
 月友歌ふて曰く

其一

ヒマラヤの雪潔き上に

曉天の明星は輝けり

其二

同時成道の大喝破

尼蓮禪河に響きたり

其三

三百六十餘會の説

五千餘卷の經文は

其四

指月の指よ今更に

仲秋無月の姿あり

鷺のみ山のあさほらけ

のどけき春のくれんとき

佛陀は金蓮取りたまひ

無言の説法あらうたと

久遠の光

破顔微笑の大士あり
迦葉尊者は第一祖

其五

西天四七二十八

六十餘歳の化縁つゞ

其六

チャイナの海は波高し

廣州府外三千里

其七

梁の武帝はよろこびつ

揚眉瞬目のおもしろさ
阿難大士は第二世

菩提達磨は法の王

錦帆風にペンカル灣

雄志のほども偲はるゝ

金陵の都は花の雲

ひじりに問へば箇はいかに

廓然無聖また不識

其八

少室八千六百尺

面壁九年只だなんだ

さて無功德の王三昧

魏をすぎ嵩山に入り玉ふ

時のいたるを待たれける

第二十九祖太祖慧可大師は支那武牢の人である、姓は姬氏父の名は寂と云へり、未だ子あらざるとき常に自ら思へり、我が家善を崇ぶ豈に令子なからんや禱ること久し矣、一夕異光の室をてらすことを感ぜり、其母因て孕む、長ずるに及びて、此の照室の瑞をもて名けて光と云ふ幼より曠達にして志氣群ならず久しく伊洛に居して博く群書を涉獵して、家産を事とせず好んで山水に遊ぶ常

に歎じて曰く孔老の教は禮術の風規なり莊易の書は未だ妙理を盡さずと、龍門香山の寶靜禪師に依て出家受具し講肆に浮游して普く大小乗の義を學す、一日佛書般若を見て超然として自得す。然りしより晝夜宴坐して既に八載を経たりしに寂黙の中に獨りの神人を見る、告げて曰く將に果を受けんと欲せば何ぞ此に滯るや、大道遙なるにあらず汝それ南せよと、光神助なるを知り因て名を神光と改む翌日頭痛すること刺すが如し、其師之を治せんとせしに空中に聲あり曰く是れ即ち換骨なり、常の痛にあらず光遂に神を見る事を師に告ぐ師その頂骨を見るに五峯の秀出せるが如し、即ち曰く汝が相吉祥なり正に所證あるべし神汝をして南せしむるものは斯れ則ち少林の達磨大師なり、必ず汝が師ならん。神光 教を受けて、嵩山少林寺に到る大道二年十二月九日なり大師入室を許さ

す師窓前に立つ其の夜大に雪降る、積雪腰を埋み寒氣骨に徹る、落涙滴々凍り愈々寒さを加ふ、密に惟へらく昔人道を求むるに骨を敲いて髓を取り、肉を刺して饑を濟ひ髪を布きて泥を掩ひ崖に投じて虎を飼ふ、古へ尙ほ此の如し我又た何人ぞと志をはけまして撓むことなく堅く立ちて動せず、大師終夜雪中に立つを見てあはれみ問て曰く汝久しく雪中に立つ當に何事をか求む、師曰く惟だ願くば和尙慈悲甘露の門を開き廣く群品を度し玉へ、大師曰く「諸佛無上の妙道は曠劫精勤して行し難きを能く行し忍び難きを能く忍ぶ豈に小徳小智輕心慢心を以て真乗を求むべけんや、徒に勤苦に勞せんのみ」又願聘せず。時に大師の慈誨を聞きて涕涙ますく長く求道の志いよく切なり。潜かに利刀を取りて自ら左の臂を斷ず、大師是れ法器なりと知ろしめし乃ち示して

曰く諸佛最初に道を求む法の爲めに形を忘る汝、今臂を吾が前に断す求むること亦た可なることあり、師復た問ふ諸佛の法印得て聞くべきや、大師曰く、諸佛の法印人より得るにあらず、師復た問ふ我れ心未だ安からず乞ふ師爲めに安ぜよ、大師曰く心を持ち來れ汝が爲めに安せん師良久して曰く心を覓むるに不可得なり、大師曰く我れ汝が爲めに安心し竟ぬ、師恍然として開解せり、大師遂にために名を易へしめ慧可と改め入室を許す。

有る時大師示して曰く外諸縁を息め内心喘ぐことなく、心牆壁の如くにして以て道に入るべし、師實參實究種々に思を碎きて心を説き性を論ずれども道理に契はず、大師たゞ其非を遮ぎり、爲めに無念の心體を説き玉はず、斯くて六年を経たり、即ち梁の大通四年壬子の歳に當る或時師達磨大師に侍して少室峰

に登る大師問ふ道何れの方に向て去らん、師曰く請ふ直ちに進前すれば是なり大師曰く若し直ちに進まば一步を移すを得ず師聞て契悟す、或る時大師に白して曰く我れ既に諸縁を息む云々而して大師は卒に衣法共に附して曰く「内法印を傳へて以て證心に契へ、外袈裟を附して以て宗旨を定む」と因て大師圓寂の後師は繼ぎて大師の玄風を開き、法を二祖僧璨に附し且つ曰く吾れまた宿累あり今必ず酬んと、金陵(鄴都)に去り玉へり。

既にして師は鄴都に於て宜しく隨て法を説き一音演暢すれば四衆歸依す、是の如きもの三十載なり然れども光を韜み跡を混じ儀相を變易するは平常底なり即ち或は諸の酒肆に入り或は屠門を過ぎり或は街談を習ひ或は廁役に隨ふ或人問て曰く師は是れ道人なり何か故ぞ是の如くなる師曰く我自ら心を調ふ何ぞ

汝が事に關せん、後笈城縣の匡救寺の三門の下に於て法要を開演す、四衆林の如く會す時に辨和法師と云ふものあり寺中に於て涅槃經を講ず、師の演法を聞て徒衆漸く引き去る辨和その憤に勝へず謗りを邑宰翟仲侃に興す仲侃その邪説に惑ふて師に加ふるに非法を以てす、師怡然として委順す、即ち隋の開皇十三年癸丑歲三月十六日なり時に年一百七歲なり後ち磁州滏陽縣の東北七十里に葬る、唐の德宗皇帝太祖禪師と謚す。

大祖大師二十八祖に參侍す、一日祖に告て曰く我れ既に諸縁を息む祖曰く斷滅と成り去ること莫しや否や師曰く斷滅を成さず祖曰く何を以てか驗となさん師曰く了々として常に知る、故に言の及ぶべきにあらず、祖曰く此は是れ諸佛所證の心體なり、更に疑ふこと勿れ。

月友乃ち是を新詩に詠うて曰く

其一

庭前三尺雪深し
 怪刀一閃一石火
 放身捨命是れいかに

求法に切なる神光は
 左の臂を斷ち落とし
 入室許せと差し出す

其二

鬼にも非ず蛇に非ず
 いかで無言におらるべき
 見れば濺血さて淋漓

大慈悲心の大ひじり
 開けば窓外銀世界
 赤き心のしられける

第三十祖鑑智大師は何れの人と云ふを知らない、初め白衣を以て二祖に謁す
 歳四十餘なり名氏を云はず、聿に來て禮を設けて祖に問ふ曰く弟子身風恙に纏
 はる云々祖曰く宜しく佛法僧に依て住すべし、師曰く今和尚を見て己に是れ僧
 なるを知る、未審何をか佛法となづく祖曰く是心是佛、是心是法、法佛無二
 なり僧寶も亦た然り、師曰く今日始めて知んぬ罪性内にあらず外にあらず、中
 間にもあらず、其心も亦然り佛法も無二なり祖深く之を器とす即ち爲めに剃髮
 して曰く是れ吾が寶なり宜しく僧瓌と名くべしと其年三月十八日光福寺に於て
 具を受く茲れより疾ひ漸く愈ゆ執侍すること二載を経たり祖乃ち告て曰く達磨
 大師竺乾より此土に來りて衣法共に吾に附す、吾れまた汝に附す、又曰く汝已
 に得法すと雖も暫く深山に入りて行化すべからず、當に國難あるべし師曰く師

既に豫め知れり、願くば示誨を垂れよ祖曰く吾れ知れるにあらず、達磨大師
 般若多羅の懸記を傳ふるに曰く「心中吉なりと雖も外頭凶なり」吾れ年代を校
 ふる正に汝にあり、當に誦かに前言を思ふて世難に罹る勿れと、然しより皖公
 山に隠れて十歳餘を経たり、則ち周の武帝佛法を廢せし時なり既にして沙彌道
 信を接し四衆の爲めに必要を述べ訖り此の法會に於て大樹下に立て合掌して終
 る、即ち隋の煬帝大業二年丙寅十月十五日なり唐の玄宗帝鑑智禪師覺寂の塔と
 證す。

鑑智大師二十九祖に參じて問て曰く弟子身風恙に纏はる請ふ和尚罪を懺し玉
 へ祖曰く罪を持ち來れ汝かために懺せん師良久して曰く罪を覓むる不可得な
 り祖曰く我れ汝が爲めに罪を懺し竟んぬ、宜しく佛法僧に依て住すべし云々

月友曰く罪性不可得なり佛法僧寶また二もなく三もなし、空朗々地了了了作廢生。

第三十一祖大醫禪師諱は道信姓は司馬氏である世々河内に居す後に蕪州の廣濟縣に走る師生れて超異なり、幼より空宗の諸の解脱門を慕ふ宛も宿習の如し、年始めて十四にして三祖大師に參じて曰く願くは和尚云々師言下に大悟す、勞に服する九載後に吉州に於て受戒す、奉侍して最も謹めり祖しばく試むるに立微を以す、其縁熟するを知りて乃ち衣法を附す師祖風を續ぎ攝心寐ぬることなく脇席に至らざるもの六十年隋の大業十三載徒衆を領して吉州に抵る群盜城を圍んで七旬解かざるに値ふ萬衆惶怖す、師之を愍みて教えて摩訶般若を念

ぜしむ時に賊衆城上を望めば神兵有るが如し、乃ち相謂て曰く城内には必ず異人あらん攻むべからずと漸く引き去る。唐の武徳甲申の歲師また蕪洲に返る春破頭山に住す、學侶雲の如くに臻る、一日黃梅路上にして親しく弘忍を接す時に貞觀癸卯の年なり太宗皇帝師の道味を仰いて風彩を瞻んと欲す、詔して京に赴かしむ師上表遜謝す前後三返終に疾を以て辭す第四度使に命じて曰く、若し果して起たずんば即ち首を取り來れ使者山に至て旨を諭す、師頸を引いて刃に就かんとす神色儼然たり、使者之を異として廻り狀を以て聞す帝彌々歎慕を加ふ、就て珍縉を賜ひ以て其志を遂げしむ、高宗の永徽辛亥の歲閏九月四日に訖んで忽ち門人に垂誠して曰く「一切諸法悉く皆な解脱す、汝等各々自ら護念して未來を流化せよ」言訖つて安坐して逝く壽七十有二本山に塔す、明

年四月八日塔の戸故なくして自ら開く、儀相生けるが如く、爾後門人敢て復た閉ちず、代宗帝大醫禪師慈雲の塔と謚す。

大醫禪師鑑智大師を禮して曰く願くば和尚慈悲乞ふ解脱の法門を與へよ、祖曰く誰か汝を縛す師曰く人の縛するなし、祖曰く何ぞ更に解脱を求むるや師言下に大悟す。

月友曰く摩訶般若の力賊の圍を解き空門を慕ふの功大宗帝をして歎慕を加へしむ是れ所謂威武も屈する能はざる好證左。

第三十二祖弘忍禪師は斬州黄梅縣の人である先に破頭山の栽松道者たり嘗て四祖に請ふて曰く法道得て聞くべき乎、祖曰く汝已に老ひたり、若し聞くこと

を得るとも夫れ能く化を廣ふせんや、若し再び來らば吾れ尙ほ汝を待つべしと即ち去る水邊に往いて一女子の衣を洗ふを見る攝して曰く寄宿し得てんや否や女曰く吾に父兄あり往いて之を求むべし曰く諾せば我れ敢て行かん、女首肯す遂に策を廻らして而して去る女は周氏の季子なり歸りて輒ち孕む父母大に惡んで之を追ふ、女歸する所なし日に里中に備紡し夕には衆館の下に宿す終に一子を生む以て不祥として濁港の中に捨つ兒流に遡りて體濡ふことなく、神物護持して七日損せず、所謂神物とは晝は二羽の鳥ありて、羽を竝べて之を覆ひ夜は二疋の犬ありて膝を屈して之を守るを云ふなり、氣體鮮明にして六根欠くることなく母之を寄異なりとして鞠養す、長ずるに及んで母と共に乞食す、人呼んで無姓兒と云へり一人の智者あり嘆じて曰く「此の子七種の相を闕きて如

來に逮ばず」後に黃梅路上に四祖の出遊に遇ふ。四祖此童子の骨相奇秀常の童子に異れりとして問て曰く汝何の姓ぞ云々祖默して其法器なるを識り侍者をもて母に請ふて出家せしむ時に七歳なり、則ち聖胎成熟遂に受衣傳法す、其の後二六時中道業欠るなく四衆を接化し能居士に衣法を附し復た四載を経て上元二年に至り忽ち衆に告げて曰く『吾れ今事畢んぬ時に行くべし』即ち室に入り安坐して逝く壽七十有四年なり塔を黃梅の東山に建て代宗帝大滿禪師法雨の塔と證す。

大滿禪師黃梅路上に於て三十一祖に逢ふ祖問て曰く汝何の姓ぞ師曰く姓は即ち有り是れ常の姓にあらず、祖曰く是れ何の姓ぞ師曰く是れ佛性、祖曰く汝性無からんや、師曰く性空なるか故に無なり祖默して其の法器なるを識り法

衣を傳附す。

月友曰く人父なくして生ると云ふは奇は則ち奇なり猶はイエスキリストの如き乎然れども古人之を信じ明匠また之を教ふ、宏智禪師忍大師の眞讚に曰く前後兩身今古一心と月友豈に之を信ぜざらんや要は此因縁により根本義に達し心性を廓明せば可なり。

第三十三祖大鑑禪師姓は盧氏其先祖は范陽の人である、父は行瑄と云ひ武德中南海の新州に左官せられ、遂に止まる、三歳父を喪ひ宅畔に葬る母李氏志を守りて鞠養す、長するに及んで家尤も貧なり師薪を鬻ひて母に供す年二十有四一日薪を負ひ市中に到る客の金剛經を讀むを聞き應無所住而生其心に至り

て感悟す、師其客に問て曰く此れは何の經ぞ何人にか得たるや客曰く金剛經と名く黃梅忍大師に得たり遂かに其母に告るに法のために師を尋ぬるの意を以てし直ちに韶州に至りて高行の士劉志略に遇ひ結んで交友と爲る、尼無盡藏は即ち志略の姑なり、常に涅槃經を讀む師暫く之を聽いて即ち爲めに其義を解脱す尼遂に卷を執りて字を問ふ師曰く字は識らず義は即ち請ふ問へ、尼曰く字すら尙ほ識らず曷ぞ能く義を會せん、師曰く諸佛の妙理は文字に關するにあらず尼之を驚異し郷重の耆艾に告げて曰く能は是れ有道の人なり宜しく請して供養すべしと、是に於て居人競ひ來りて瞻禮す、近きに寶林古寺の舊地あり衆議營緝し師をして之に居らしむ。四衆雲霧の如く集り俄に寶坊と成る。師一日忽ち念うて曰く我れ大法を求む豈に中道にして止むべけんや明日遂に行いて昌樂縣

の西岩室の間に至る智遠禪師に遇ふ師遂に請益す、遠曰く子を觀るに神資爽拔にして殆んど常人に非ず吾れ聞く西城の菩提達磨心印を黃梅に傳ふと汝當に彼れに往きて參次すべし師辭し去りて直ちに黃梅に抵る五祖大滿禪師に參謁す、祖問て曰く何れより來る師曰く嶺南より來る、祖曰何事をか求めんと欲す師曰く唯作佛を求む祖曰く嶺南人無佛性なりいかんぞ佛を得ん、師曰く人に即ち南北あり佛性豈に然らんや、祖是れ異人なりと知り乃ち呵して曰く槽廠に著き去れ、能是を禮して而して退き便ち確坊に入り杵臼の間に服勞し晝夜息まず八ヶ月を経たり祖大法付受の時至るを知り遂に衆に告げて曰く正法解し難し徒に吾か言を記持して己か任と爲すべからず汝等各自ら意に隨て一偈を述べよ若し語意冥符せば則ち衣法を皆附せんと。

時に會下七百餘僧の上座神秀は學内外に通じて衆の仰する所成く共に推稱して曰く若し尊秀にあらすんば誰れか敢て之に當らん神秀はか衆の譽むるを聞て復思惟せず、偈を作ること成りおはりて數度呈せんと欲し行いて堂前に至る心中恍惚として徧身汗流る呈せんと擬すれども得ず、前後四日を経て一十三度遂に偈を呈することを得ず秀乃ち思惟すらく如かず廊下に向て書著せんには他和尙看見するに従ひ忽ち若し好しと云は、出て禮拜し是れ秀か作なりと云はん若し堪へずと云は、扞げて山中に向て年を數えん人の禮拜を受けて更に何の道をか修せんや、是の夜三更人をして知らしめず、自ら燈を執りて偈を南樓の壁間に書して心の所見を呈す、偈に曰く「身は是れ菩提樹、心は明鏡の臺の如し、時々勤めて拂拭せよ、塵埃を惹かしむる勿れ」と祖經行して忽ち此

偈を見て是れ秀が述ふる所と知り乃ち讚歎して曰く後代之に依りて修行せば亦勝果を得んと各をして誦念せしむ。

師碓坊にありて忽ち偈を誦するをき、乃ち同學に問う是れ何の章句ぞ同學曰く汝知らずや和尙法嗣を求む各々をして心偈を述べしむ、此は即ち秀一座の述る所なり和尙深く歎稱を加ふ、將に法を附し衣を傳えんとするならん、師曰く其偈如何ん同學爲めに誦す師良久して曰く美は則ち美なり了はることは未だ了せず、同學呵して曰く庸流何をか知らん狂言を發すること勿れ、師曰く子ち信せずや、願くば一偈を以て之を和せん、同學答へず相視て而して笑ふ師夜に至り一りの童子に告て引いて廊下に至る師自ら燭を執りて童子をして秀の偈の傍に於て一偈を寫さしむ曰く「菩提本と樹にあらず、明鏡も亦臺にあらず、本

來無一物、何れの處にか塵埃を惹かん」この偈を見て一山の上下皆な曰く是れ實に肉身の菩薩の偈なりと内外かまびすしく稱す、祖之を盧能の偈なりと知り即ち曰く是れ誰かなせるぞ未見性の人なりと乃ち塗沫す夜に及んで祖竊に碓坊に入り問て曰く米白めりや未たしや師曰く白めり未だ篩ふこと有らざることあり、祖杖を以て臼を打つこと三下す師箕の米を以て三たび簸ふて入室す。

祖示して曰く諸佛出世の一大事の故に機の大小に隨て之を印導す遂に十地三乘頓漸等の旨有り以て教門を爲す、然れども無上微妙秘密圓真實の正法眼藏を以て上首大迦葉尊者に附す、然りしよりこのかた展轉傳授すること二十八代菩提達磨に至り此土に來りて可大師を得承襲して以て吾に至る、今法寶及び所傳の袈裟を以て汝に附す、善く自ら保護して斷絶せしむると勿れと、

師跪いて衣法を受け啓して曰く法は則ち既に受く衣は則ち何人にか附せん、祖曰く昔し達磨初めて至る人未だ信ぜず故に衣を傳へて以て法を得ることを明かす、今信心已に熱す衣は乃ち争の端なり汝が身に止めて復た傳へされ且つ當に遠く隠れて時を俟ちて行化すべし謂ゆる受衣の人は命懸絲の如し師曰く當に何れの處にか隠るべき祖曰く懐に逢はゞ即ち止まれ會に遇はゞ且く藏れよ、師是を禮し已つて衣を捧げて而して出づ黃梅の麓に渡船あり祖自ら送りて此の所に至る師揖して曰く和尚速に飯らるべし我已に得道す正に自ら渡るべし祖曰く汝得道すと雖も吾れ尙ほ渡すべしと自ら竿を取りて彼の岸に渡し已り、祖獨り寺に飯る一衆皆な知ることなし。それより後ち五祖上堂せず、衆來り咨問するあれば則ち曰く吾が道行さぬ、或人問て曰く師の衣法何人か得たる、祖曰く

能者得たり、是に於て衆議すらく盧行者名は能なりと、尋訪するに既に失せり衆彼が得者なるを知り乃ち共に趨り逐ふ時に四品將軍發心して慧明と云ふものあり衆人の先となり趨りて兩月の中間にして大度嶺に於て師に及ぶ師曰く此の衣は信を表す力を以て争ふべけんや、其衣鉢を盤石上に置て草間に隠る慧明至りて之を上げんとするに力を盡してあぐる能はず、大に驚きて曰く我れ法のために來る衣のために來らず、師遂に出て、盤石上に坐す、慧明作禮して曰く望むらくは行者我が爲めに法要を示せ、師曰く善をも思はず惡をも思はず正與廢の時那箇か是れ明上座本來の面目明言下に大悟す、復た問うて曰く上來蜜語蜜意の外還て更に蜜意有りや否や、師曰く汝がために語るものは即ち蜜に非ず、汝若し返照せば蜜は汝が邊にあり、明曰く慧明黃梅に在りと雖も實に未

だ自己の面目を省せず今指示を蒙る人の水を飲んで冷暖自知するが如し今行者は即ち慧明が師なり、師曰く汝若し是の如くならば吾と汝と同く黃梅を師とせん、明禮謝して歸る後ち出世せし時、慧明を道明と改む師の上字を避ければなり、參するものあれば師に參せしむ師は衣法傳受の後四縣の獵師の中に隠れ十年を経て儀鳳元年丙子正月八日南海に届り、印宗法師の法性寺に於て涅槃經を講ずるに遇ふ師廓廡の間に寓止す暴風利旛を颺く二僧の對論を聞く一は曰く旛動くは一は曰く風動くと往復酬答して未だ曾て理に契はず、師曰く俗流輒ち高論に預ることを容るすべしや否や直ちに風旛の動くにあらず仁者心の動くを以てす、印宗竊かに此語を聆き悚然として之を異とす、翌日師を邀へて室に入れ風播の義を徵せしむ、師、具さに理を以て告ぐ、印宗覺えず起立して曰く行者

は定めて常人にあらず師は是れ誰とかなす、師更に隠す所なく直ちに得法の因由を舒ぶ、是に於て印宗弟子の禮を執り禪要を受くるを乞ふ、乃ち四衆に告げて曰く印宗は具足の凡夫なり今肉身の菩薩に遇ふ、即ち座下の盧居士を指して曰く即ち是れなり因て請て傳ふる所の信衣を出して悉く瞻禮せしむ、正月十五日に至り諸の名徳を會して之が爲めに剃髮せしむ二月八日法性寺智光律師に就て滿分戒を受く其戒壇は即ち宋朝の求那跋陀三藏の置く所なり、三藏記に曰く後に當に肉身の菩薩あり此の壇に在りて受戒すべし、又梁の末に眞諦三藏壇の側に於て二本の菩提樹を植えて衆に謂て曰く此より復一百二十年に大開士あり此樹下に於て無上乘を演べて無量の衆を度せん、師具戒し己りて此樹下に於て東山の法門を開く宛も宿契の如し、明年二月八日忽ち衆に謂て曰く吾れ

此に居ることを願はず舊隱に歸らんと要す。時に印宗縮白千餘人と師を送りて寶林寺に到る、韻州の刺史韋據請じて大梵寺に於て妙法輪を轉ぜしめ竝に無相心地戒を受く門人記録し目けて壇經と爲す盛に世に行はる、而して後ち曹溪に歸り大法雨を雨らす覺者千數に下らす壽七十有六沐浴して坐化す、唐の憲宗帝大鑑禪師と謚し宋の太宗帝大鑑眞空禪師と加謚し塔を大平興國の塔と云ふ、宋の仁宗帝天聖十年に師の眞身及び衣鉢を迎へて大内に入れ供養す、大鑑眞空普覺圓明禪師と加謚す、宋の神宗帝大鑑眞空普覺圓明禪師と加謚す。師黃梅の碓坊にありて服勞す、大滿禪師有る時夜間坊に入り示して曰く米白きや師曰く白めども未だ篩ふことあらざるなり、滿杖を以て白を打つこと三下す、師箕の米を以て三たび簸ひて入室す。

月友曰く不善不思惡の處本來無一物なり淨智圓明、廓然無聖、また此の風光に外ならず。

第三十四祖弘濟大師諱は行思吉州安城の人である姓は劉氏なり、幼にして出家し群居道を論ずる毎に師唯り默然たり後ち曹谿の法席を聞き乃ち往いて參禮す、問て曰く「當に何の所務か云々祖深く之を器とす、」會下の學徒衆しと雖も師首に居す、亦た猶ほ二祖の言はざれども少林之を得髓と謂ふがごとし。一日祖師に言て曰く從上衣法雙び行し師資たがいに授く衣は以て信を表し法は乃ち心を印す、吾れ今人を得たり何ぞ信ぜざるを患へん、吾れ衣を得てよりこのかた此多難に遇ふ況や後代の爭競 必ず多きをや衣は即ち留めて山門を鎖せんと

汝當に化を一方に分つて斷絶せしむること無るべし師既に法を得て吉州青原山の靜居寺に住す、而して石頭を接し法資となし唐の開元二十八年庚辰十二月十三日陞堂衆に告げ跏趺して逝す後ち弘濟大師と諡す。

弘濟大師曹谿の會に參じ問て曰く當に何の所務か、即ち階級に落ちざるべき祖曰く汝曾て其麼をか作し來る、師曰く聖諦もまた爲さず祖曰く何の階級にか落ちん、師曰く聖諦すら尙ほ爲さず何の階級か之れあらん、祖深く之を器とす。

月友曰く空裡固より界畔なし梯磴何の處にか安排せん心地の風光無舌人をして解語せしめん乎無耳根をして聞持せしめん乎。

第三十五祖無際大師諱は希遷端州高安陳氏の子である母初め懷娠して葦茹を喜ばず、師孩提に在りと雖も保母を煩はさず既に冠し諾然自ら許す。十四歳にして初めて曹谿に參ず得度して未だ具戒せず、六祖將に滅を示さんとす、師問て曰く和尚百年の後希遷未審當に何人にか依附すべき、祖曰く尋思し去れ祖の順世するに及んで師毎に靜處に於て端坐し寂として生を忘るゝ如し時に第一座南嶽懷讓和尚問て曰く汝が師已に逝す空しく坐してなにかせん、師曰く我れ遺誠を稟く故に尋思するのみ、讓曰く汝に師兄あり行思和尚と云ふ今青原山に住す、汝が因縁彼れに在り、祖の言甚だ直なり汝自ら迷ふのみ、因て師即ち祖龕を禮辭して直ちに青原に至る終に得法す。

無際大師青原に參ず原問て曰く汝いづれの處より來る師曰く曹谿より來る原

乃ち拂子を擧して曰く曹谿にまた這箇ありや、師曰く但た曹谿のみにあらず西天にもまた無し、原曰く子ち曾て西天に到ること莫らんや否や師曰く若し到らば即ち有らん、原曰く未在更に道へ師曰く和尚もまた須らく一半を道取すべし、全く學人靠ること莫れ、原曰く汝に向て道ふことを辭せず恐らくは己後人の承當する無らん、師曰く承當は無きにしもあらず人の道得するなけん原拂子を以て打す、師即ち大悟す。

月友曰く恁麼擧拂子の處曹谿西天の二途を立すべからず、況や甲乙丙丁をや然るに師は三段論法を知りて一段論法を悟らず是れ拂子を以て打たるゝ所以なり阿呵々。

第三十六祖弘道大師諱は惟儼絳州韓氏の子である、年十七潮陽の西山慧照神師に依りて出家す、衡嶽の希操律師に納戒せり博く經論に通じ戒律を嚴持す。一日自ら歎じて曰く大丈夫當に法を離れて自ら淨なるべし誰が能く屑々として細行を事とせんや、首め石頭の室に經る便ち問ふ『三乘十二分教云々喜く自ら護持せよ、師馬祖に奉侍すること三年復た石頭に返る、一日里にあり次て石頭問て曰く汝這裡に在りて什麼をか作す。師曰く一切爲さず頭曰く恁麼ならば即ち閑坐せりや師曰く若し閑坐せば即ち爲せり、頭曰く汝道ふ爲さずと箇の甚麼をか爲さる、師曰く『從來共に住して名を知らず任運相將ひて只麼に行く、古より上賢猶ほ識らず造次の凡流豈に明らむ可けんや』師得法の後澧州藥山に居す、海衆雲の如く會す。

弘道大師石頭に參じて問うて曰く三乘十二分教某甲粗ぼ知る、嘗て聞く南方に直指人心見性成佛と實に未だ明了ならず伏して望む和尚慈悲指示せよと頭曰く恁麼もまた得ず不恁麼もまた得ず、恁麼不恁麼總て得ず、汝作麼生、師措くことなし、頭曰く汝が因緣此に在らず且く馬大師の處に往き去れ、師命を稟けて馬祖を恭禮し依て前問を伸ぶ、祖曰く我れ或る時は彼をして揚眉瞬目せしめ或る時は伊れをして揚眉瞬目せしめず、或る時は揚眉瞬目するもの是なり或る時は揚眉瞬目するもの不是なり汝作麼生、師言下に大悟し便ち作禮す、祖曰く、汝なんの道理を見てか便ち禮拜す、師曰く某甲石頭の處に在りて蚊子の鐵牛に上るが如し、祖曰く汝既に如是ならば善く自ら護持せよ然りと雖も汝が師は石頭なり。

月友曰く石頭は青原下の着宿馬大師は南嶽下の達人なり、得不得と云ば是
不是と云ふこれ同かこれ別か曰く別々不別。

第三十七祖雲巖無住大師緯は曇成鍾陵建胃の王氏の子である、少くして石
門に出家す、百丈海禪師に參する二十年因縁契はず後に薬山に謁す、山問ふ
いつれの處よりか來る、師曰く百丈より來る、山曰く百丈何の言句か有りて衆
に示す、師曰く尋常曰く我れに一句子あり百味具足すと。山曰く鹹は則ち鹹味
淡は即ち淡味、鹹ならず淡ならず是れ常味作摩生か是れ百味具足底の句、師答
ふるなし、山曰く目前の生死を如何せん。師曰く目前生死なし、山曰く百丈に
あること多少の時ぞ師曰く二十年、山曰く二十年百丈に在りて俗氣もまた除か

ず、或る時山問ふ百丈更に甚麼の法をか説く云々師言下に大悟し遂に法嗣とな
る。

雲巖無住大師初め百丈に參持すること二十年後ち薬山に參ず、山問ふ百丈更
に甚麼の法をか説く師曰く百丈有る時上堂大衆立定す、柱杖を以て一時に
趁ひ散してまた大衆と召す衆首を回す、丈曰く是れ甚麼ぞと、山曰く何を早
く恁麼に道はざる、今日子に因て海兄を見ることが得たり師言下に大悟す。
月友曰く學道の人未だ三界の攀籠を出ることなく生死の窠臼免れ難し南邊
打着すれば北邊動搖す、即今百丈の柱杖子恁麼の閑忘想を拂ひ去りて痛快
なり。

〇

第三十八祖洞山悟本大師諱は良所、會稽の人である。姓は俞氏、幼年にして出家し、師に従ひ般若心經を念誦す而して無眼耳鼻舌身意の處に至り、忽ち手を以て面を捫て、師に問て曰く「某甲眼耳鼻舌等有り、何が故ぞ經に無しと云ふや、其師駭然之を異とし曰く「吾れ汝が師に非ず、即ち指して五洩山の禮默禪師に往かしめ、披剃す、年二十一、嵩山に至りて臭戒す、初め南泉の會に參じ、次に滄山に侍し、更に指示を得て雲巖大師に參じ、得法大に宗風を擧揚す。

洞山悟本大師雲巖に參じて問て云く、無情の說法、什麼の人か聞くことを得ん。巖曰く「無情の說法、無情聞くことを得、師曰く「和尚聞くや否や、岩曰く「我れ若し聞くことを得ば、汝、即ち吾が說法を聞くことを得ざるなり、師曰く「若し恁摩ならば、即ち良价和尚の說法を聞かざるなり、巖曰く「我が說法、汝、尚ほ聞かず

何に況んや無情の說法をや、師此に於て大悟し、乃ち偈を述べて雲巖に呈して曰く「也、太奇也、太奇、無情の說法、思議すべからず、若し耳を將ちて聽かば、終に會し難し、眼處に聲を聞て方に知ることを得ん、巖許可す。

月友曰く「無情の說法、無情聽く耳を將ちて聞くべからず、眼を以て聞くべし、此間の消息言ひ得て、分明なり。謹聽々々。

第三十九祖雲居弘覺大師諱は道膺、幽州玉田の人である。姓は王氏、童草にして苑陽の延壽寺に出家す、二十五歳、四方に遊ひ、翠微に至りて道を問ふ、會々僧の豫章より來るあり、盛んに洞山の法席を稱す、師遂に造る、山問ふ「いづれの處より來る、師曰く「翠微より來る、山曰く「翠微何の言句ありてか、徒に示す、師曰く「翠

微羅漢を供養す某甲問ふ羅漢を供養す羅漢還て来るや否や微曰く備ち毎日箇の甚磨をか唾ふ、山曰く實に此語ありや否や師曰く有り、山曰く虚しく作家に參見し来る或る時山問て曰く「閻黎名は云々祇對と異なるなし」師洞水を見て悟道し即ち其旨を洞山に申す、山曰く吾か道汝に依りて流轉窮りなけん師始め三峰に止まりて其の化未だ廣からず後ち法を雲居に開き四衆臻り萃まる。

雲居弘覺大師洞山に參す、山問て曰く閻黎名は何磨ぞ、師曰く道膺、山曰く向上更に道へ師曰く向上に道は、即ち道膺と名けず、山曰く吾れ雲巖に在りし時の祇對と異なるなし。

月友曰く從來形名なく天真性相を忘す元是れ眞壁の平四郎なり。

○

第四十祖同安道丕禪師は何許の人たるを知らず、即ち雲居に參じて侍者となり年を経て修行す或る時雲居上堂示して曰く、「恁麼の事を得んと欲せば云々師、聞て自悟す」後ち洪州の鳳棲山同安寺に住し盛んに雲居の宗風を開演す、有る時僧問ふ如何なるか是れ和尚の家風、師曰く金鷄子を抱きて霄漢に歸り、玉兔懐胎して紫微に入る、曰く忽ち客の來るに遇はば何を以てか祇待せん師曰く金果早朝に猿摘み去り、玉萃晚れて後ち鳳銜み來る。

同安丕禪師雲居或る時示して曰く恁麼の事を得んと欲せば須らく是れ恁麼の人なるべし、既に是れ恁麼の人何んぞ恁麼の事を愁へん、師聞て自悟す。

月友曰く恁麼の田地暗昏々にして是非を覺えざるにあらず淨明々にして自己自ら現はるゝなり、外道二乗の見到墮する勿れ。

第四十一祖後の同安大師諱は觀志先きの同安に參じて得處深し先同安將に示寂せんとす上堂に曰く、多子塔前に宗子秀て五考峰前事如何と三たび擧すれども未だ對するものあらず末後師出て、曰く夜明簾外排班して立ち、萬里歌謠して太平を遵ふ。同安曰く須らく是れ驢漢にして始て得べし、爾じより同安に住し後の同安と號す。

後同安大師前同安に參じて曰く古人曰く世人の愛處我れ愛せず、未審如何なるか是れ和尚の愛處、同安曰く既に恁麼なることを得たり、師言下に於て大悟す。

月友曰く自を愛し他を愛す是れ依報正報の愛なり即ち有相の愛處なり凡べ

て軌則なく一物なく不知不識なりと解するは非相の愛處なり、即ち無色界の愛處なり佛祖の兒孫誤るなくんば幸甚々々。

第四十二祖梁山和尚諱は緣觀何許の人たるを知らない、後ち同安に參ず、執侍すること四歳、衣鉢侍者に充てらる、同安有る時上堂袈衣を掛くべき時到来師袈衣を捧く、同安法衣を取る次て問て曰く「如何なるか是れ袈衣下の事云々」師乃ち大悟す禮拜して感涙衣を濕す、安曰く汝既に大悟す又違ひ得るなり、師曰く密安示して曰く密有々々、有る時學人問ふ如何なるか是れ袈衣下の事、師曰く衆聖も顯はすなし。

梁山和尚後の同安に參侍す安問て曰く如何なるか是れ袈衣下の事、師對るな

し、安曰く學佛未だ這箇の田地に到らずんば最も苦なり、汝我に問へ、遵はん、師曰く如何なるか是れ衲衣下の事、安曰く密、師乃ち大悟す。

月友曰く寰中は天子塞外は將軍、是れ密有の玄旨なり形枯木の如し心死灰の如くなるも密有を識得せざれば佛祖庫裡に用不着なり。

○

第四十三祖大陽明安大師諱は警玄江夏張氏の子である知通禪師に依りて出家す、十九にして大僧となり圓覺了義を聴く講席に能く及ぶものなし、遂に遊方して初めて梁山に到り問ふ「如何なるか是れ無相の道場云々師遂に省有り」便ち禮拜し本位に倚て立ち、山曰く何ぞ一句を道取せざる、師曰く遵ふことは辭せず恐らくは紙筆に上らん、山笑て曰く此語碑に上せ去ることあらん、師偈を

献じて曰く「我れ昔し初機學道に迷ふ萬水千山見知を覓む今を明らめ古を辯じて終に會し難し、直に無心と説くも轉た更に疑ふ、師の秦時の鏡を默出するを蒙り、照し見る父母未生の時、如今學了す何の得る所ぞ、夜鳥鷄を放てば雪を帯びて飛ぶ」山曰く洞山の宗倚るべし、一時に聲價籍々たり、山没して塔を辭し大陽に至る、堅禪師席を譲り之に主たらしむ師禁觀奇章、成重有り兒稚の時より日に祇た一食し自ら先德附授の重きを以てす、足限みを越えず脇席に至らず年八十二に至て猶ほ是の如し終に陞座衆を辭して終る。

大陽明安大師因に梁山和尚に問ふ如何なるか是れ無相の道場、山觀音の像を指して曰く這箇は是れ吳處士か畫、師進語せんと擬す、山急に索めて曰く這箇は是れ有相底那箇か是れ無相底師言下に於て省有り。

月友曰く泰時の明鏡、五臟六腑八萬四千の毛孔三百六十の骨節を照すのみならず、終に父母未生以前の眞面目を照す、是れ所謂無相の道場なり。

第四十四祖投子和尙諱は義青、青社李氏の子である七齡にして穎異なり、妙相寺に往き出家す、經を試み十五にして得度す百法論を習ふ未だ幾くならず歎して曰く三祇塗遠し自ら困するも何の益かあらん、乃ち洛に入りて華嚴を聽く嘗て諸林菩薩の偈を續み即心自性と云ふに至りて猛省して曰く、法は文字を離る寧ろ講すべけんやと即ち棄て、宗席に遊ぶ、時に圓鑑禪師會玄聖嚴に居す、一夕青色の鷹を畜ふと夢む以て吉徴となす、且に屆りて師來る鑑、禮以て之を延く而して外道問佛の語を看せしむ師了然開悟す遂に禮拜す、後三年鑑時に洞下

の宗旨を出だして之に示す、悉く皆な妙契す、附するに太陽の頂相、皮履布直綴を以てし囑して吾に代りて其宗風を續がしむ曰く久しく此に滯ること無れ善く宜しく護持すべし遂に偶を書し送りて曰く「須彌大虛に立つ、日月輔けて轉ず群峰漸く他に倚る、白雲方に改變す、少、林風起り叢がり、曹溪洞簾卷く、金風龍巢に宿す、宸若豈に事礙せんや、」太陽禪師老年に至るも法嗣なし、圓鑑禪師太陽に參じ機悟相契ふ乃ち附法せんとす、圓鑑辭して曰く吾れ先に得處あり濟下に於て得法す依て二法を得る能はず止むなくんば某甲衣信を持して和尚のために永く人に轉じて相附屬せん、太陽許して曰く我れ偈を書して證明せん即ち書して曰く「陽廣山頭の草君に憑りて價ひ燃かなるを待つ、異苗繁茂の處深蜜にして靈根を固ふす」圓鑑禪師茲に至りて投子に附法し其約を果す。

投子和尚(大陽)に參ず、圓鑑外道佛に問ふ有言を問はず無言を問はずとの因縁を看せしむ、三載を経て一日問うて曰く汝話頭を記得するや否や試に舉せよ看ん、師對へんと擬す、鑑其口を掩ふ師了然として開悟す。

月友曰く良馬の鞭影を見て行くが如く非思量の處に止らず無言説の處に滯らす氣息を絶し命根を斷じ親しく那一物に參ずべし。

○

第四十五祖芙蓉山道楷禪師諱は道楷幼より閑靜を喜びて伊陽山に隱る、後ち京師に遊んで術臺寺に藉名す、法華を試みられて得度す、投子に海會に謁し乃ち問ふ、「佛祖言句云々師乃ち開悟し」再拜して行く、子曰く且つ來れ閑黎、師顧みず、子曰く汝不疑の地に到る、師即ち手を以て耳を掩ふ、後ち典座となり

投子に隨て低細綿密に那し著子を參究し來り、道風大だ高し、或時僧問ふ胡茄の曲子正音に墮せず、韻青霄に出づ請ふ師吹喝せよ、師曰く木鷄夜半に啼き鐵鳳天明に叫ぶ、曰く恁麼ならば則ち一句の曲千古の韻を含む滿堂の雲水盡く知音、師曰く無舌の童兒能く繼和す。

芙蓉山道楷禪子投子の青和尚に參じて乃ち問ふ佛祖の言句は家常の茶飯の如し、之を離れて外別に爲人の處有りやまた無しや、青曰く汝道へ、寰中は天子の敕還て堯舜禹湯を假らんやまた無しや、師進語せんと擬す、青拂子を以て師の口を撼つ、曰く汝意を發し來る早く三十棒の分あり師即ち開悟す。

月友曰く寰中は天子の敕にて足れり還て堯舜禹湯の古聖王を雇ひ來るの

要なし釋迦老師出世の達磨大師現在すとも固より冷暖自知すべきのみ、僅かに心と説き性と説き禪と云ひ道と云ふも早く是れ白雲萬里。

第四十六祖丹霞淳禪師諱は子淳劍州賈氏の子である、弱冠にして出家し、芙蓉の室に徹證す初め雪峰に住し後に丹霞に住す其の最初の咨問に曰く如何なるか是れ無上云々師言下に於て大悟す終に真歇清了を得て法嗣となす。

丹霞淳禪師芙蓉に問て曰く如何なるか是れ從上諸聖の相授底の一句芙蓉曰く喚て一句となし來れば幾ばか宗風を埋没せん師言下に於て大悟す。

月友曰く若し誤りて一句を下せば雪上に鳥跡あるに似たり既に染汚に屬す噫不空の空理落空亡者の知る所にあらず。

○

第四十七祖、悟空禪師諱は清了、道號を真歇と云ふ其母懷に抱き襁褓にして寺に入る佛を見て喜び眉睫を動かす、威な之を異とす、年十八にして法華を講ず、得度して成都の大慈に往き經論を習ひ大意を頌す、蜀を出て江沔漢に至り丹霞の室を叩く霞問ふ「如何なるか是れ空劫云々」豁然として契悟す、師一日徑ちに歸りて霞に侍立す、霞一掌して曰く將に謂へり爾有ることを知ると、師欣然として之を拜す翌日上堂して曰く「日孤峰を照して翠りに月溪水に臨んで寒し祖師玄妙の訣下心に向ひて安ずること莫れ便ち下座、師後ち五臺に遊び京師に之を汁に浮び長盧に抵り建炎の末四明に遊び詔りより育王に住し慈寧皇太皇の命により阜寧崇先に開山たり。

悟空禪師丹霞に參ず霞問う如何なるか是れ空却以前の自己、師對へんと擬す霞曰く爾 闇しきことあり且く去れ一日鉢孟峰に登り豁然開悟す。

月友曰く鉢孟峰頂十萬壁落なく四面また門なし、空々大空竟空心海波平かにして龍の睡り穩かなり。

○

第四十八祖天童狂禪師諱は宗狂、久しく悟空の侍者と爲り晝參夜參、横參豎參然れども猶ほ徹せざるあり、悟空問て曰く近日見處如何云々、空即ち印證す後ち天童に住して法筵大に振ふ或る時上堂に曰く却前に歩を運び世外に身を横ふ妙契は意を以て到るべからず、眞證は言を以て傳ふべからず、直に得たり虚靜氣を斂めて白雲寒巖に向て而して斷へ、靈光暗を破りて明月夜船に隨て而

して來る正與廢の時作應生か履踐せん、編正曾て本位を離れず縦横那ぞ因縁を語るに涉らん。

天童狂禪師、久しく悟空の侍者となる一日悟空問て曰く汝近日見所如何、師曰く、吾れ又恁麼なりと道はんことを要す、空曰く來在更に道へ、師曰く如何ぞ未だしや、悟空曰く汝道ひ來ること未だしと云はず未だ向上の事に通せず師曰く、向上の事道ひ得たり、空曰く如何なるか是れ向上の事、師曰く設ひ向上の事道ひ得ると雖も和尚の爲めに擧示する能はず、空曰く實に汝未だ道ひ得ず、師曰く伏して願くば和尚道取せよ、空曰く汝吾に問へ道はん、師曰く如何なるか是れ向上の事、空曰く吾もまた不恁麼なりと道はんを要す、師聞て開悟す、空即ち印證す。

月友曰く恁麼と云ひ不恁麼と云ふ既に二に落ち三に落つ向上の事更に如何明々了々知る人ぞ知る他に向て求むる莫れ。

第四十九祖雪竇鑑禪師諱は智鑑、滁州吳氏の子である、兒たりしとき母ために師の手瘍を洗ふ問て曰く是れ何ぞと對て曰く我が手佛手に似たり長じて眞歇と長蘆に依る、時に宗珙禪師衆に首たり即ち之を器とす、後ち象山に遯れて修行中百怪も惑はず能はず深夜開悟す證明を延壽に求む然して復珙和尚に參す宗珙和尚時に天童に住す師をして書記に充てしむ一日此の因縁あり許可せらる。雪竇鑑禪師宗珙天童に主たりし時一日上堂に擧す世尊密語あり迦葉覆藏せずと師聞て頓に其旨を悟り列にありて涙を流し覺えず失言して曰く吾輩什麼と

してか從來せざると、珙上堂罷んて師を呼て問て曰く汝法堂に在り何としてか涙を流す、師曰く世尊密語あり迦葉覆藏せず、珙許可して曰く何ぞ雲居の懸記にあらざらん。

月友曰く迦葉の言世尊涅槃經に證明せり乞ふ見よ九々元來八十一、八兩必竟是れ半斤、話り盡す山雲海月の情。

第五十祖天童淨和尚諱は如淨、越上の人である、母、山神兒を授くの夢みて孕めり趙宋の隆興元年癸未七月七日を以て生る出家の後勤めて經を學び十九歳より之を棄て、祖席に參す雪竇の會に投じ尋常座禪すること拔群なり、或る時淨頭の役を望む時に資問うて曰く曾て染汚せざる處如何か淨得せん、若し

道ひ得ば汝に淨頭を充てん、師措くことなく兩三月を経るに猶ほ未だ道ひ得ず有る時師を請し方丈に到らしめ問て曰く先日因縁道得する乎、師擬議す、時に寶示して曰く淨子曾て染汚せざる處如何か淨め得ん、師答へず、一歳餘を経たり寶又問て曰く道ひ得たりや、師未だ道ひ得ず、時に寶曰く舊窠を脱して當に便宜を得べし如何ぞ道ひ得ざらん、然しより師聞きて力を得志を勵まして功夫す一日忽然として豁悟し方丈に上りて即ち曰く某甲道得すと、寶曰く速に道得せよ、師不染汚の處を打す、聲未だ畢らざるに窠即ち打つ、師汚を流して禮拜す、寶即ち許可す、後ち淨慈に有りて彼の開發の因縁を報せんがために淨頭たり、天童に住する四年微疾を感じ遺偈を書して圓寂す曰く「六十六年。罪犯彌天。打箇踴跳。活陷黃泉。曠從來生死不相干。」乃ち大宋紹定元年戊子七

月十有七日なり日本安貞二年に丁る。

天童如淨和尚雪竇に參す、竇問て曰く淨子曾て染汚せざる所如何か淨め得ん師一歳餘を経て忽然として悔悟して曰く不染汚の處を打す。

月友曰く本來淨明の人なり豈に染汚不染汚あらんや然るに如淨老師雪竇の一擲に遭ひ直ちに不染汚に滯り染汚に落ち正に一歳餘を経たり、最後の一棒大慈大悲なり。

○

第五十一祖、道元大和尚は日本の第一祖で即ち高祖大師である。姓は源氏、人皇六十二代村上天皇九代の苗裔、父は久我内大臣通親公母は大織冠鎌足公の後裔、關白大政大臣藤原基房公の女なり、兄弟八人あり男子五人女子三人

師は其の五男である母胎にあること十三ヶ月、土御門天皇正治二年正月二日京都に生る、即ち神武天皇紀元一千八百六十年一月二十六日なり三歳父を喪ひ八歳母に別れ無常を感じて出家の志を發し建曆二年十有三歳志を決し春月微雲に罩められ花影幽徑に徘徊し香風脉々として輕寒衣襟を襲ふの時四明山麓に到り外叔良觀法眼の禪室を叩き遂に出家の志を達するを得たり、十四歳四月九日天台座主公圓僧正に就き薙髮し翌十日菩薩の大戒を稟承して比丘となる、十五歳一段の疑團は起れり即ち『本來本法性天然自性心』の二句なり之を山門の碩學者徳に歴參質義するも圓滿なる理教の指教を受くる能はず依てまた外叔なる三井寺の公胤僧正に質す、僧正曰く子が疑點は我宗堂奥の玄談にして傳教慈覺兩大師よりの累代口訣なり、然れども甚だ説明に苦む遙に聞く西

天の達磨大師東土に來り方に佛心印の傳持せられしより今其の宗風天下に布けり名けて禪宗といふ、若し此事を決擇せんと思はゞ速かに建仁寺に赴き榮西禪師の室に入りて其故實を尋ぬべし、師其教を聞き悦びて建仁寺に詣り榮西禪師に謁し便ち問て曰く『本來本法性天然自性身什麼としてか三世の諸佛は發心成道するや』禪師曰く『三世諸佛あることを知らず狸奴白牯は却て有ることを知る』師深く其教示を服膺す。

榮西禪師は明庵と號し備中の人なり俗姓は賀陽と云ふ幼にして聰敏十四才にして出家し深く佛教の玄理を學び入宋して顯密の蘊奥を窮め居ること半年にして飯朝し再び入宋して天台山萬年寺に詣り臨濟第十四世虛菴懷徹禪師に參學せしが虛菴天童に遷るに及び亦た隨かつて往き朝參暮請具に佛祖の大道を究盡し

飯朝後建仁寺を開創し顯密心の三宗を宣揚し衣法を明全に傳へ、建保三年七月五日世壽七十五にして入寂す、則ち師は十六歳の時なり是より明全和尚に師事し、日夜臨濟の宗旨を參叩し律藏を習ひ止觀を究め重ねて菩薩の大戒を受け、修證すること前後九年、榮西禪師宋國より齋せる五千餘卷の大藏經を周覽すること二回顯密心の三宗悉く稟承し、明全和尚の嫡嗣となれり、貞應二年師年二十四才更に大願を發し入宋求法の準備を整へ後堀川天皇の宣旨及び兩六波羅府帥の關券を得、榮西先師の塔廟に禮辭し又佛法守護の統領なる白山明神に祈誓し前の左衛門督從三位入道木下道正、及び加藤四郎左衛門最正等を携へ此の年二月廿一日其師明全和尚と俱に京都を發し三月筑前の博多に達し、其下旬に商船に駕し萬里の蒼溟に入り、四月初旬浙江省慶元府に着せり、時に南宋

寧宗皇帝の嘉定十六年なり、此年五月十三日師浙江省慶元府大白山天童景德寺に詣り無際了派禪師に謁し明全和尚と共に掛錫す、明全和尚時に年四十歳なり嘉定十七年師二十五歳、天童の留錫既に二載に涉りしかば、叢林の遍歴を思ひ立ち此の秋徑山に詣り浙翁如琰禪師に參見す、問答數番機契はす、去つて台州に至り盤山思卓禪師を小翠巖に訪ふ問答數番又機契はす、去りて天台の雁山、平田萬年、慶の護聖寺を歴訪し阿育王山に至り大光和尚に參じ再び天童に詣り無際禪師に師事せんとし、飯途偶々禪師の遷寂を聞き落膽また落膽竊かに飯朝の志を決し明全和尚に告別せんとて、途中徑山に登り羅漢堂を拜す時に一老僧あり風采神異眼光人を射る師に告げて曰く老兄萬里遠く來り切に大法を求む未だ人天の導師一代の宗匠に遭はず、宜しく長翁如淨に參謁すべし、頃日勅

請に應し天童山に晋院せり、師之を聞き大に歡喜作禮し、其の名を問へば曰く予は此間に住する老健なりと云ひ訖はりて見えず、蓋しこの異僧は羅漢尊者の應現乎。

寶慶元年師年二十六、日本の嘉祿元年なり、五月再び大白山天童景德禪寺に掛錫し、初めて如淨禪師に妙高臺に焼香禮拜す淨祖曰く佛々祖々面授の法問現成せりと、師乃ち狀を上りて時候に拘はらず威儀を具へず愚懷を拜問せんを乞ふ淨祖之を聽許す。師再び天童に掛錫するや直に明全和尚を了然齊に省し客秋別離後に於ける諸方參叩の狀趣を語りければ、和尚悲喜交々臻り感涙に咽べり既にして和尚疾に罹り四大不調なるを以て師日夜看護するも藥石效なく遂に遷寂せり、世壽四十三時に寶慶元年五月二十七日なり、師悲哀し其二十九日

闍維して、舍利三百六十餘顆を收め飯朝の後榮西先師の廟側に瘞藏す。師淨祖に參見し、孜孜汲々日を以て夜に繼ぎ、面壁打坐暫時も放過せず求道の心念至切熾くが如く、參究の功日に益々成熟す、淨祖或る時後夜の坐禪に入堂し、大衆の睡眠するを嚴誡して曰く參禪は須らく心身脱落なるべし、只管打睡して什麼を爲すにか堪へん、師傍らに於て豁然として大悟し、直ちに方丈に上りて焼香す、淨祖問て曰く焼香の事作麼生、師曰く身心脱落し來る、淨祖曰く身心脱落脱落身心、師曰く這箇は是れ暫時の伎倆、亂りに某甲を印する者と莫れと淨祖曰く脱落身心、師禮拜す、淨祖曰く脱落脱落、時に福州の廣平侍者傍に在りて曰く、外國の人恁麼地なることを得たり實に細事に非すと、淨祖曰く此中幾か拳頭を喚し脱落雍容し又靈霹す。

師無上正等正覺を成就し、如來の正法眼藏を單傳し而して日夜に坐禪辨道して粉骨碎身す、淨祖侍者に請す、師固辭して受けず、是より先き師の聲譽世出世に轟く、理宗皇帝師の盛徳を敬慕し、畫宗李龍眠の十六羅漢像を賜ふ、蓋し御庫の秘寶なり、師或る時江西に行化し曠野を過ぎ急症に罹る侍者道正看護に力を盡せども同起の色なし、時に白衣の神嫗あり化現して藥を授け與ふ服すれば病忽ち癒ゆ道正名を問ふ嫗の曰く吾は日本の稻荷神なり、元公求法の大願に感じ常に隨て擁護す、又或時師行化の因み神童あり道傍に化現す、師に告げて曰く聖者道業既に熟す、速に日東に飯錫し大法を弘通して以て人天を化益すべし師之を異とし其名を問へば對へて曰く吾は韋將軍なりと言ひ訖りて見えす、蓋し韋駄尊天なり。

寶慶三年師年二十八、(即ち日本の嘉祿三年にして此年安貞と改元せり) 在宋既に五年に涉りしのみか此の秋韋駄尊天より飯朝をさへ愆遷せられし故、度生時縁の漸く熟するを悟られ、淨祖に謁し焼香禮拜す、涕淚悲泣し法乳の慈恩を感謝し告別歸東の旨を陳ぶ淨祖老懷無限の感涙を催ふし遂に之を聽許し、尋いて侍者に命じ道場を嚴飾せしめ、師を召し芙蓉楮祖の袈裟、寶鏡三昧五位顯訣竝に自贊の頂相を授け、告げて曰く汝は異域の人なるを以て之を授けて大法嗣承の信を表するなり宜しく國に飯り大法を宣布し廣く人天を利濟すべし、又城邑聚落に住すること勿れ、國王大臣に親近する勿れ、只深山幽谷に居して一箇半箇を接待し吾宗をして斷絶せしむる勿れ、師感泣拜謝して終に淨祖に訣別す師發するに臨み白山助筆の一夜碧巖あり、大權修理菩薩の同航來朝化儀を擁護

せらるゝあり、海上颶風の難に遭ひ觀音淨聖の救護せらるゝあり、舟は十數日を経て肥後の國河尻に達し、陸路京師に飯錫し建仁寺に止住せり。師先づ榮西先師の塔廟を拜し、兄弟叔姪乃至近親威屬に面會せられ、共に祝意を敘し、參見間法の道俗に對し普く坐禪を勸むるの素懷より、弘教傳道の起點もかなと普勸坐禪儀一卷を撰述せり。

寛喜元年師年三十歸朝後既に三年を経たれば、觀機三昧より出て是の歲山城の國宇治郡深草の里安養院と名くる廢院に遷られ諸佛諸祖の勝躅を履み日夜只管打坐せり、世稱して深草の佛法房の聖人と謂へり、師は此の間諸宗の高僧より王作將士等の參見問法者には、親しく佛祖正傳の大法を教示せり、辨道話なる垂訓は正に是れ寛喜三年中秋の述作なり、而して安養院の幽居は僅に膝を

容るゝに過ぎずして、緇素を接化すべき道場に堪へざるを以て同じ深草の里なる極樂寺の舊趾につき一寺を建立あり、天福元年の春移錫せられたり、觀音導利院と云ふ師年三十四才なり、文歷元年師年三十五觀音導利院にありて日夜内外道俗の接化に従事し玉ふ是の歲日本曹洞宗第二祖孤雲懷辨禪師を得て終に嫡嗣とせらる、嘉禎元年師年三十六、法堂僧堂を建立し同二年師年三十七、伽藍總て具備せるを以て即ち命名して觀音尊利院興聖寶林寺と稱す、十月十五日祝國開堂の大禮を行ふ、四條天皇特に興聖寶林禪寺の勅額を下し賜ふ。

嘉禎三年師年三十八才、是より寛元元年に至る七星霜の間興聖寺に在住せらる初め天福元年より前後在山十有一年なり、而して京洛の間に於て篤信檀越の懇請に應じ、枉駕說法せられたること一百餘回受菩薩戒の弟子二千餘人各宗

の名匠碩學參見聞法す、正法眼藏中の四十五種の垂誡及び典座教訓、學道用心集、正法眼藏、隨聞記、與聖寺語錄は此の間の垂訓なり、寛元元年師年四十四、道香朝野に薰徹し徳風遐邇に扇揚し隆々たる教化果日の天に昇るか如く、四衆欣慕景仰すること赤子の慈母を視るが如し、然るに師は七月解制の翌日、院事を義準和尚に統べしめ、國司波多野義重の請に應じ二祖孤雲禪師以下の徒弟を率ゐ飄然去て越前に行化す蓋し京洛在住の教化は自然に貴族傳道に傾き易く遂に平民傳道の素懐に辜負し後世相續の兒孫、紅塵紫埃に染汚せられ、參禪辨道を忽諸に付するに至らんを憂慮したまいての大慈なり、師七月下旬越前に着し翌寛元二年七月伽藍經營稍成るを以て十八日進院せられ命名して傘松峰大佛寺と云ひ即日祝國開堂の法要を修行す、一に與聖寺の儀の如し、九月一日

法堂落成し尋いて僧堂亦た竣工す、十一月傘松峯を改めて吉祥山と稱す、寛元四年六月十五日更に大佛寺を永平寺と改む。

此の時に當り化議遠近に霑被し檀信の參見聞法するもの日に月に加はり而して法式説法の修行せらるゝや毎に參拜聞法の信徒一千人を下らず、又四方の學徒風を望んで到り、參禪辨道日夜に汲々たり其の化門の隆盛なること古來其比を見ず、之より先嘉禎中師與聖に在住するや人あり鎌倉に下りて北條泰時を教化せんを勸む師曰く志なきものには佛法を説くも益なしと、仁治三年泰時死し孫經時嗣いて執權となり、寛元四年卒し弟時頼嗣いて執權となる、其翌寶治元年七月時頼特使を永平寺に遣はし、自ら弟子の禮を取り、切に關東人民の化導を懇請す、師其志を嘉みされ、八月三日越前を發し中旬鎌倉に着す、時

頼大に悦び迎へて自邸に館し禮待甚だ渥し、尋いて菩薩戒を受け入道して法號を請ふ、師乃ち道崇と名く、其の偏諱を興るなり師寶治二年二月下旬鎌倉を辭し三月十三日永年寺に歸錫す、時に欽仰措く能はず、依て新に土木を興し莊大の寺觀を經營し固く住山を請ふ師峻拒す、今の建長寺即ち是れなり、時頼また越前六條の地三千貫を寄附して香積の資糧に供せんとす師使僧玄明を叱責してまた受けず、是れ後世の兒孫名纏利鎖に羈絆せられ祖業の大事を放棄せんを恐れてなり。

寛元六年四月十五日結夏上堂說法す其前後に於て天華繽紛として亂墜せり、輪下の衆僧參拜の道俗皆な其の希有殊勝なるを瞻仰せざるものなし、寛元五年正月十五日師布薩を修行し説戒したまふに五色の彩雲あり丈室當面の紙障に

鬚髮たり、其間今の午後零時より三時までとす寶治二年四月より十一月十二日まで永年寺僧堂の内外に於て時々殊勝なる異香馥郁す、寶治三年正月元日永平寺に於て羅漢尊者の木像及び李龍眠の畫像悉く皆な大光明を放つ、建長三年正月五日夜半靈山院庵室にて花山院入道宰相及び其他の道俗を接化す、時に神鐘の靈響あり、乍ちにして斷へ乍ちにして續き縹渺隱約の間に傳ふることに幾んど二百杵許り唯た師と入道宰相とのみ之を聞き他は之を聞くこと能はずりしなり、是れ何れも諸天善神諸佛菩薩の聖教宣揚を尊重讚嘆し供養し恭敬し奉るなり。

建長二年師年五十一後嵯峨上皇深く其徳風を欣仰せられ、勅使を永平寺に遣はし紫衣及び佛法禪師の徽號を賜ふに、師固く謝辭して再び受けず、上皇嗟嘆

久ふしてまた復た勅使を永平寺に遣はさる、此の時に當り師の俗兄太政大臣通光公薨じ、其子大納言通忠公嗣ぎて要職にあり師の勅命を固辭するを聞き憂慮措く能はず、乃ち宗族を會し謀議を定め、急使を永平寺に遣はし理を盡して聖旨の受くべきと闕下に天恩を拜謝すべきとを以てす、師其言の理あるを諒し勅使を今莊驛に要し紫衣及び徽號を拜受し後ち入朝して天皇及び上皇に謁し、深く聖恩の洪大を感謝す、此年渡多野義重一切藏經を謄寫し永平寺の經藏に納む師一生の言教にして今日に傳はるものは寶慶記一卷、普勸坐禪儀一卷、學道用心集一卷、正法眼藏九十五卷、永平清規二卷、永平廣錄十卷、傘松峯道詠二卷、正法眼藏隨聞記一卷なり。

建長五年師年五十四年正月六日最後の說法として入大人覺を教誡し、七月

十四日永平寺の法席を二祖禪師に譲り以て大法の舉揚を付囑し、八月五日山を下り、京師に病を療養せらる途中吟咏あり。

十年喫飯永平場。七箇月來臥病牀。討藥人間一暫出。如來授手見醫王。草の葉に首途せる身の木の目山。空に路ある心地こそすれ。

而して道途恙なく京師に入り高辻西の洞院なる俗弟子覺念の家に入す、其懇請に應じたるなり、後嵯峨上皇之を聞き召し特に勅使及び醫官を遣はし、慰問診候せしめ玉ふ然れども藥石效なく八月二十八日夜半沐浴して衣を整へ偈を書して曰く

五十四年、照第一天一、打三箇ノ跣跳、觸ニ破大千、一嘆、渾身無ニ著處、活陷ニ黄泉。一筆を投じて入滅す二祖孤雲禪師以下義重覺念の道俗に至るまで、皆哀痛悲慟

し殆んど人事を辨せざるに至るを寵留むる三日神色生けるが如し異香馥郁とし
て室に満つ閣難して舍利を得ること算なし九月六日孤雲禪師親ら靈骨を奉じ遺
弟以下結縁の道俗を率ゐて京師を發し、十日永平寺に歸龕し十二日如法に入涅槃
槃の盛禮を修行す、恭敬供養前古比なし、尋いて寺の西北隅に塔して靈骨を封
擴し奉り、塔を承陽と謂ふ今の承陽殿是なり、是より先、師の訃音天閣に達
しければ上皇震悼したまひ特に勅使を下し吊慰し玉ふ、而して都鄙遠近師の
教化に浴するものと浴せざるものとに論なく、皆その入滅を聞きて哀痛悲歎せ
ざるはなかりき、師世壽五十有四、法臘四十有一、其の入滅の日は後深草天皇
建長五年八月二十八日にして大陽曆に推算すれば即ち神武天皇即位紀元一千九
百十三年九月二十九日なり、故に今は此の月此日を忌日と定む師滅後六百二年

を経て嘉永七年二月二十四日孝明天皇特に勅書を永平寺に下し佛性傳東國師の
謚號を賜ひ、また二十五年を経て明治十二年十一月二十二日明治天皇は深く師
の聖德を軫念ましまして、更に承陽大師の徽號を加賜し玉ひ又更に六百五十回
の大遠忌には勅額「承陽」を賜ふ。

◎座禪

濁りなき心の水にすむ月は

波もくだけで光とどなる

◎教外別傳

あら磯の波もえよせぬ高岩に

かきもつくべきのりならばこそ

第五十四祖瑩山紹瑾大和尚は、高祖大師四代の法孫にして即ち太祖大師である。姓は藤原氏、越前國多稱村豪族某の子なり父母三十歳を越ゆれども子なし依て宿世の罪業を懺悔し放生の功德あるを信し、殺生を禁じ慈悲を旨とし、日夜多稱の觀音に祈願して一子を求む。

文永五年一月某の夜、其母夫人日輪虚空を離れて飛び來り吾が口に入れるを呑むと夢みて姪娠せり、時に年三十七なり、夫人は是れより殊更に觀音大士に祈誓して曰く平生の祈願空しからず今己に大悲の感應を蒙れり我等此身のあらんかぎり恭敬供養し奉るも慈恩に報ひがたし、然れども尙ほ此上の大慈大悲は妾が身を擁護ましまして必ず聖子を生ましめたまへと毎日三百三十三の禮拜

を爲し、三十三卷の普門品を讀誦すること一日も怠ることなかりしが遂に十月八日朝嗽の昇る時聊かも苦痛なく安らかに分娩し玉へり紫雲屋上を掩ひ異香室に充つ面貌端正丰姿秀拔風神尋常の嬰孩に異れり。文永七年庚午師年三才襁褓の中にあり哆々和々と共に南無々と唱へられしかば、三寶を禮する姿自然に備れり、見る人聞く人嘆稱して神童とぞ噂しけり、文永九年師年五才資性穎敏生れながらにして能く知る誠に凡人に非ず、去れば平生の遊戯にも石を積み塔を起し土を圍め佛像を造り、佛事をなすを以て樂とせり然れども性甚だ卞急にして輕躁の振舞あり、輒もすれば嘔り腹立ち、異しきまでに狂ひ叫びて自ら傷るさへ知らざる程なれば父母の歎き一方ならず醫藥もまた治す能はざるなり之に依り母は止むなく復々多稱の觀世音に祈誓せり曰く此兒たとひ敏捷絶倫な

るも瞋恚の毒熾心の病となり遂に薰習して消滅することなくんば、安んぞ能く
 身を立て名を顯はして我等が所願を満さしむることを得んや、唯願くば大悲哀
 愍して此の業病を瘥したまへと日夜丹誠怠らざりしが、奇なる哉、師の惡辯條
 ち和ぎ恰も生を替へたる如し、文永六年師年六才一日觀音の聖像を禮拜し突然
 母に問ひ曰く此菩薩は何處に住し、如何なる業をなし如何なる功德ありやまた
 此菩薩は人なりや人にあらざらんや、母聞て大に驚き而も深く答ふる能はず。
 只だ供養恭敬すべきを以てす、梅檀は二葉より香しく、文永七年師年七才郷校
 に就いて書を學び玉ふに經史の類は教授を待たずして獨り通曉し、世間塵俗の
 書類を繙くを好み玉はず造次にも佛經を讀誦し三寶を禮敬すること宿習の如し
 建治元年師年八歳離塵求法の志深く、遂に父母に出家を乞ひ若し許さざれば

物を食せずとて三日絶食するに至る、父母大に驚歎し終に塵中に留むべき兒に
 あらざるを覺り釋尊降誕の日を撰み、四月八日相携へて永平寺に登り徹通義介
 禪師を拜し驅鳥の沙彌となる、弘安二年師年十二、此數年間は親しく介祖の訓
 誨を受け廣く内外の典籍を學び、又大衆の後に從て勤修精進少時も怠ること
 なし、或人戲に問て曰く苦修練行して何事をか求むるや、師答て曰く佛法は
 戲論を以て求むべからずと、其活潑敏捷概ね此の如し、弘安三年師年十三歳
 二月十八日介祖の教に隨ひ孤雲懷昇禪師につき大戒を爲けて僧となる、禪師其
 志の勇猛にして必ず爲すことあるを察し切に歎賞して曰く此の子後生なりと
 雖も夙に大人の所作あり他日人天の導師となりて大に吾が宗を振興するならん
 と識し玉へり昇祖病あり師湯藥に侍んべる、一日衆に告て曰く吾老病また起つ

こと能はざるを知る憾む所は此子を接得して其の生涯を觀ざるに在り、遂に師に囑して復た介祖に依止せしむ并祖八十三歳にて八月廿四日遷化せらる、師弘安七年まで介祖の左右に侍り晨參暮請頭燃を救ふが如く洞上の宗旨を究め、眼を佛敎祖錄に晒し古聖先徳の行事を追慕せらる。

弘安八年師年十八、正月廿日介祖に請ひ初めて遊方行脚したまふ、時に寂圓和尚寶慶寺に住して化門盛なりしかば師先づ寶慶寺に至り寂圓和尚に參じ一夏を過す、秋に及び寶慶を辭して直に京師に赴き萬壽寺の寶覺禪師白雲の慧曉和尚等に相見し器重敬愛せらる、尋いて叡山に登り専ら天台の法門を扣究す弘安九年師年十九、秋七月叡山を辭し法燈禪師を紀伊の興國寺に訪ひ扣參す、法燈一見して大に賞嘆し留て冬を過さしむ、弘安十年師年二十徧く天下の叢席を歴

遊し宗匠知識の門庭を扣き、到る所所賞讃を蒙むると雖も師未だ自ら安とし玉はず、正應元年師年二十一越前に歸り寶慶寺に造り再び寂圓和尚に參じ尋て永平寺に登りて介祖を省す。介祖大に喜び茶を點じて慰勞せらる。

正應二年師年二十二介祖に隨從して加賀國大乘寺に至り會々法華經を看讀し法師功德品の中父母所生眼悉見三千界と云ふに至り大に省悟するあり、直ちに方丈に諸り所解を呈す介祖曰く自己の一大事を究めんと欲せば些子の覺觸に於て則を取ることを得ざれ汝更に去つて工夫せよ、師揖して退き是より心を攝めて夜も寝ねず、恰かも仇敵者と室を同ふして處るが如く大に精彩を着けられたり、正應三年師年二十三永仁二年師年二十七此の間五六年間は常に大乘寺にありて親しく介祖の訓誨を受け所謂戒從知識戒從經卷の金言を奉し工夫請益怠

りなく又能く一切經を看讀し了れりとぞ是年十月二十日介祖上堂趙州從諗禪師の法語『平生心是れ道』と云へる公案を擧示したまふを聞き豁然として徹證し乃ち曰く我れ會せりと介祖問て曰く爾作座生か會す、師曰く黒漆の崑崙夜裡に奔る、介祖云く未だ穩かならざるあり更に一句を道へ看ん、師曰く茶に逢ては茶を喫し飯に逢ふては飯を喫す介祖笑を捨て曰く爾向後當に洞上の宗風を起すべし、永仁三年師年二十八、正月十四日師に命じて入室せしめ高祖より介祖まで嫡々相承せる法衣を授與し斷絶せしむる莫れと附屬す。

永仁四年師年二十九阿波國城滿寺に行化し永仁五年遙に肥後の大慈寺に到り寒巖禪師を訪ひ共に宗乘を照揚し、永仁六年師年三十一阿波の城滿寺に在住し始めて佛祖正傳の戒法を開き得戒するもの七十五人正安元年師年三十二介祖書

を齋らして使僧を遣はし、師を召す依て直ちに城滿寺を辭し加賀國大乘寺に歸錫し、介祖の左右に奉侍す、正安二年師年三十三介祖に代りて衆のために説法垂誠するあり、傳光録の公案五十三則の示誨は、是年正月十二日を以て其始めをなすと云ふ正安三年師年三十四富樫氏藤原家向來りて法要を問う、師ために告げて曰く『佛祖單傳の妙旨は直に人をして心地を開明し本分に安住せしむ是を本來の面目を露はすと名け、亦た本地の風光を露はすと名く身心俱に脱落して坐臥同く遠離す、不思議不思議能く凡聖を超越し迷悟を透過し生佛の邊際を離却す、故に萬事を休息し諸縁を放下して一切なまず、六根無作、這箇は是れ阿誰ぞ、曾て名を知らず、身となすべきにあらず、心となすべきにあらず、慮らんと欲して慮絶し、言はんと欲して言窮す若し能く此に於て分明ならば

縁に對せずして照し眼雲外に明かに、思量せずして通じ宗默說到朗かなり、乾坤を坐斷し、全身獨露す』富樫氏之を聽き了りて大に喜び心をば傾けて益崇敬せり、乾元元年師年三十五介祖年八十四歳院事を謝し師に命じて大乘寺の席を董さしむ峨山紹碩明峰素哲無涯知洪皆な衣を改めて師に歸し化門甚だ盛なり。嘉元元年より徳治二年まで五年の間大乘寺に住せられ、接物利生法席日に隆くなり、坐禪用心記、三根坐禪說、信心銘拈提等此の間の撰述なり、延慶元年師年四十一、介祖年九十歳老病の兆あり、依て接衆度生の暇必ず介祖の座側に侍し、湯藥の供養皆な親ら之を奉じ孝順至らざるなし、延慶二年師年四十二介祖病漸く重く遂に湯藥をも服したまわず、九月十四日遺偈を代書せしめ、恬然として遷化し玉へり延慶三年師年四十三、九月十四日介祖の一周忌たるを以て

對真上堂ありければ天花亂墜の祥瑞あり參集せる善男善女その花を掬せりと云應長元年師年四十四加賀國法苑山淨住寺の可鐵鏡西堂は嘗て阿波の城滿寺にて師より授戒せる以後益師の道化を欣膽し乃ち檀越と相謀り淨住寺を譲り改めて開山第一世たらんを懇請す師十月十日遂に其請に赴く、正和元年師年四十五、能登國に滋野信直と云へるあり其夫人平氏と共に師を尊崇歸依し自家の山莊なる能州酒井保の地若干を奉らんとす、其狀に曰く
 『我等此の山を施す志は唯和尚一時の居住を望むのみ、成壞興廢を思はず、今より以後たとへ貧士乞人に與へたもふあるも我れ之を顧みず一度和尚に施せし後復た管領することなし、永く捨心を發し了れり何ぞ重ねて希望あらんや』
 と師其喜捨心の至誠に感じ之を納れて其地に臻れば奇峯怪巖繚繞し卉木鬱葱天

日を隔離し其中間平かなること掌の如し實に師の尊懷に愜へり、依て窃かに終焉の地と定め芥を縛して庵居せり。

正和二年師年四十六富樫家尙の嫡男藤原家方と云ふあり嘗て父家尙と共に深く師を歸崇せし因縁により若干の資財を喜捨し酒井保の庵地に伽藍を献立しけるに、其の經營の始めに當り十六大羅漢の中なる第八伐闍羅弗多羅尊者應現ありて種々の祥瑞ありしかば遠近の道俗隨喜讚歎伽藍落成、開堂演法、洞谷山永光寺と命名せり、正和三年師年四十七能登國羽喰の郡司得田某と云ふもの光孝寺を建立し師を請じて開山となす、文保二年師年五十一、此の間多くは、永光寺に在住せり然れども或時は大乘寺或時は淨住寺、或時は光孝寺等化導無邊なりき而して悲母は此年八十七歳にて逝去懷觀大姉と號す。

元應元年師年五十二、秋八月滋野信直の夫人永光寺に來りて懇懇に出家得度を求む師大に驚き且つ曰く、昔永祖支那より歸朝して京師の建仁寺に在住のとき祖母明智優婆夷を得度せり、我れ昨夜その事を夢ひ今夫人忽然來りて出家を求む或は明智の再來歟と、即ち得度して默請祖忍尼と名く此年九月八日峨山和尚師の眞像を拜寫して題贊を請ふ乃ち書して曰く

誰識庵中不死人。未レ搖ニ掌握ニ鎮ニ烟塵。凜々威烈無ニ等匹。三尺竹篋奪ニ劍輪。器宇廓落。絕學天真。眉毛爭釣不疑地。端的眼睛文不レ親。

同月十五日羅漢供養の講式を修す、十六の尊者光を放つ應現の奇瑞永平高祖の其れの如し爾後毎月十五日必ず羅漢供養を修す、元應二年師年五十三洞谷山中蓮華峯の勝地につき一つの堂宇を建立し圓通院と名け悲母の生涯念持せる觀

音大士の尊像を安置し、默譜祖忍尼に命じて香華供養の給仕たらしむ。

元享元年師年五十四、能登國鳳至郡櫛比莊に律院あり、諸嶽寺と各け行基僧正の開基にて觀音大士を本尊とし靈感日に新なる靈場あり、是年四月十八日の夜院主定賢律師夢むらく本尊薩埵慈憫大悲の光を放ち和雅柔輦の音を以て明かに告げたまへり、今釋尊より嫡々相傳へたる第五十四世の大善識、本國酒井の洞谷山に出世し大法輪を轉ぜられ實に靈山の一会に異ならず、汝速かに此寺を彼の聖者に譲り永く佛法繁興の道場たらしむべし、師また同じ夜靈夢を感じ山門頭に至り『總持の一門八字に打開す』と香語を拈出せられしさへ覺えありたり、定賢律師は靈夢を檀越に告げ將に洞谷山に登り、師を屈請せんと其用意の整はんとするとき、師偶々櫛比の莊に到り玉へり、定賢律師大に喜び遽に迎

へたてまつりて具さに靈夢の次第を述べけるに、師また包む所なく靈夢の模様を説き示し給ふ、律師は深く奇瑞の符合せるに驚き、歡喜讚嘆直ちに寺門を師に譲り、師は懇請を請けさせたまひ、六月八日開堂說法、寺を總持と名け山を諸嶽山と號す、今の能州大本山別院の境地是なり、加之定賢律師は寺領の一切をも寄附せられたり。

是の年秋八月後醍醐天皇十種の疑問を垂れたまひ孤峰覺明和尚をして敕使となし師の答話を徴し給ふ。

敕問一に曰く祖意と教意とは是れ同か是れ別耶
敕問二に曰く達磨は是れ香至國王の第三子にして四大五蘊具足の身なり何に依りて一莖の蘆に乗る耶

敕問三に曰く禪家に謂ゆる不立文字教外別傳と然りと雖も一大藏經皆是れ文字なり禪家の語録も亦是れ文字なり、若し文字なくんば佛祖の言教何に依てか末世に流布せん耶。

敕問四に曰く有るが曰く此身は四大假合なり命終の時地大は地に歸し水大は水に歸し火大は火に歸し、風大は風に歸す、然らば則ち何物ありてか地獄に墮する耶。

敕問五に曰く、人皆な先考先妣の爲めに靈供を備へ茶湯を献ずと雖も少許も消すること無し、知らず供を受くるや否や。

敕問六に曰く、世尊雪嶺に於て六載修行し、明星現するるとき忽然として大悟し曰く、我と大地の有情と非情と同時に成道すと悟人は最も成道すべし迷人

何に依りて成道するや。

敕問七に曰く、金剛經に曰く、一切諸佛及び諸佛の阿耨多羅三藐三菩提の法は皆な此經より出づ矣、金剛經は是釋迦佛の所説なり、然るに、一切諸佛此經より出づといふ此經を先とするや諸佛を先とするや。

勅問八に曰く經に曰く、大通智勝佛は十劫道場に坐して佛法現前せずと云々今時の人一生坐禪修行するも如何ぞ佛道を成ぜん耶。

敕問九に曰く經に曰く、清淨の行者涅槃に入らず破戒の比丘地獄に入らずと清淨の行者は涅槃に入るべきに什麼としてか入らざる、破戒の比丘は地獄に入るべきに什麼としてか入らざる。

敕問十に曰く朕趙州無の公案を以て提撕年尚ほ未だ透徹せざるを以て恨とな

す、如何か工夫用心せん耶。

以上の十疑問は難解中の難解なり然れども師には敢て難問にはあらざりき。故に快刀亂麻を断つが如く親切而も明了に奏對せられたり、天皇は大に悦ばせたまひ叡感斜めならず紫衣を賜ひ且つ九月十四日藤原行房卿に命じ寺號の額を書せしめ之を下賜し特に優待を加へ總持寺を官寺となし給へり。

元亨二年師年五十五、皇后官御懷妊、産期に臨んで大に惱みたまふ、乃ち勅あり總持寺の放光菩薩を祈念したまうに靈徵あり、快然として分悦し給ふ是に於て上は紫闈より下は白屋に至るまで、師の德音に欽服すること愈隆なり、是年八月廿八日皇帝陛下特に繪旨を下したまひ、總持を以て日本曹洞の本山賜紫出世の道場とせられたり、元亨三年師年五十六の春二月無涯智洪に命じ

て加州淨住寺の席を繼がしめ壺庵至簡をして能州光孝寺に住せしめ又明峯素哲は大乗より來りて親しく師の左右に奉持せり、正中元年師年五十七、門庭の施設年一年より煽んに雲兄水弟の競ひ集るもの一日より多し、依て百弊の生ぜんを慮り給ひ是年三月十六日總持寺十ヶ條の龜鑑を書して永く兒孫の遵式となす而して清規法繩も完備せるを以て峨山紹碩和尚を擧げて總持寺の席を繼がしめ、退院上堂の後、明峰素哲を率ひ酒井の永光寺に赴きまたまふ。正中二年師年五十八、此の年春花の頃より微恙あり七月に至り遽かに書を發し悉く法嗣を座下に召し八月八日永光寺の院事を明峰素哲に囑し、此日より衆のために入大人覺を提示せられ且つ曰く這は是れ釋尊より祖々相承し吾が祖永平大乘の古儀なりと、同月十四日、淨髮沐浴したまひ介祖の眞を供養し、大齋を設け翌十

五日羅漢供養を修し、説法常の如し、夜半に至り鐘を鳴し大衆を方丈に集め衣を整へ座に登り示して曰く我れ化縁已に盡き泥洹時至る佛世尊は二月十五日中夜に滅を示し我れ今八月十五日夜半に衆を辭す、同中に異あり異中に同あり汝等諸人這箇の道理を知らんと要すや、便ち書して曰く

自耕自種閑田地。幾度賣來買去新。無限靈苗繁茂處。法堂上見挿鎌人。筆を投じて坐化したまふ、大衆悲慟哀哭し燭光ために暗きが如し、翌十六日訃音を四方に發し法子法孫道俗喪に會するもの數千百人、斯くて靈龕を留むること七日、二十一日靈龕を庭前に移し、法に依て荼毘し奉り舍利無數を得たり乃ち大乘寺、永光寺、淨住寺、總持寺の四所に分ち塔を建て之を供養し共に傳燈院と號す、師入滅の後三十年を経て正平九年甲午三月二日後村上天皇敕

して佛慈禪師の徽號を賜ひ更に四百十有八年を経て安永元年壬辰十一月二十九日後桃園天皇親しく宸翰を賜はり弘徳圓明國師と諡す、後明治四十二年明治天皇は常濟大師と諡したまへり。

附記
孝明天皇より國師號御宣下御詔勅の寫

勅。吉祥山永平寺開基道元禪師。本出三葦胃。便入三桑門。重瞳照室。夙表三人天之師。一葦航海。遙求佛祖之道。圓慧圓淨。辭彼震且之雲。身心脫落。歸我日出之邱。觀有爲法。普濟萬物。以無礙慈。覺悟衆生。創興聖於城南。闢吉祥於北越。玄化偏覆。芳聲遠播。九重延想。萬里契誠。相門降貴。武夫銷勇。盛哉妙機。大哉道德。爾來瓜瓞綿々。閱永平六百星霜。馨香芬々。薰楓宸一脈天風。緬懷厥人。

豈無_二徽號_一。宜_レ諡_二佛性傳東國師_一。嘉永七年二月二十四日
後桃園天皇より國師號御宣下御宸翰の寫

勅。佛慈禪師。人无天宗師。佛祖嗣嫡。奏對十事叡問。爲_二賜紫出世道場_一。感_二得一夢
勝因_一。現放光動地祥瑞。開_二法門於四處_一。振_二德化於_二八紘_一。身嘗雖_レ下_レ沒_二竹塢白雲之
室_一。經_中悠遠_上。名今得_レ下_レ達_二楓宸青鎖之闈_一。來_中永慕_上。苟思_二彼德_一。如_レ遇_二其人_一。因_レ諡_二弘
德圓明國師_一。安永元年十一月二十九日

○
月友は禪の御話をするにつけて、女性でありますから考へました、何を考案
したかといふに、元來禪は實際である空論ではないと云ふことであります、さ
れば一場の禪味を帯びた笑草や、面白き話のみではだめであるのであります。

是れは戲論と云ふもので、今日の謂はゆる禪學者の喜ぶ領分です、乃て月友は
方角違ひに面白くない眞面目な方面に考へを向けた、何故とならば大正の今日
は總て戲論では駄目てありますから民本主義さへ唱ふる時代てあります、權利
義務を主張する時代てあります、女性ですらデモクラシーを云々する時代ては
ありませんか、而して證據物件がなければ勝つべき訴訟さへまけますよ、てあ
りますから歴代祖師様方の實際も悟りの經路を證據物件もない根本原理を説明
せんとしたのであります。今は終に結論に到達しましたから、回顧一番して三
國に涉り之を綜合して見ましやう、人は何と云ふても月友は上來述べ來りまし
た此五十三則の勝躑の外に禪はないと信じます、否ありとも此の範圍を脱す
ることは出來ますまいと思ふのであります。釋迦牟尼佛成道の端的は既に御話

を致しました如く佛性の靈光を御發見になりましたに於ては、眞如法性の姿を御覽になりましたのであります。さうして之を吾等衆生に御示し下されたのが五千餘卷の經文であります。つまりは四十九年一字不説です。如何に釋尊でも十分の説明は出来ません、水の冷たさは説明では分りません、夏の虫は冬の話は分りません、生來の盲者には如何に説明しても日月星晨の姿は知れません、説明がなくとも飲下すれば水の冷たさはわかります、見れば日月の姿は知れます、然るに吾等は云はゞ眼病患者と同様である。迦葉尊者のみ患者ではない、依て金波羅華によりて自己の心性即ち眞如法性の姿か笑ひながら了解が出来た、而して天竺二十八祖の中、多くは同じ式によりて悟道せられてある、阿難尊者の刹竿倒却の如き、婆須蜜多尊者の酒器の問答の如き、龍樹尊

者の如意珠の問答の如き迦那提婆尊者の滿鉢一針の如き、伽耶舍多尊者の風鈴の問答の如きである、併し如何に問答ありとも決して説明では徹證が出来てゐない、若しも説明の明晰に近きものを求めば或は二十二祖摩拏羅尊者と二十一祖婆須盤頭尊者の問答である曰く何物か即ち是れ諸佛の菩提なる、廿一祖曰く心の本性即ち是なり、師又曰く如何が是れ心の本性、二十一祖曰く十八界空是なり、是れ佛祖と佛祖とのみ知る他は了することが出来ない、之を聞て寧ろ落空亡の外道に落在するのが多い。

達磨大師に到りては則ち然らず、先づ弟子をして其姪異見王を教えしめた。

『在胎爲身、處世爲人、在眼曰見、在耳曰聞、在鼻辨香、在口談論、在手執捉、在足運奔、徧現諸門、俱該沙界、収攝在微塵、識者知是佛性、不識者喚精魂』、是れが弟子

波羅提の説明である、御自身では如何にと云ふに梁の武帝の間に對しては無功徳と喝破せられた實に親切である達磨大師でなければ誰か帝王に向つて斯く明晰に而も率直に答ふるものがあらう而して武帝が如何なるか眞の功德と詰問すれば、淨智妙圓にして體自ら空寂たり、實に世尊に密語なしてある、然れども武帝猶ほ解する能はず、更に聖諦第一義と問へば又實に親切である廓然無聖と答へられた、前と同じ意味の答である、更に解する能はずして朕に對するものは誰ぞと問へば又々親切である、不識と答へられた月友でも若し人の問ふあらば斯様に答ふる外は知らない、實に本地の風光は斯くありなん、二祖慧可大師に對しては如何、二祖曰く我れ諸縁を息む、達磨曰く斷滅と成し去ること莫んや否や、又々大親切である、二祖曰く斷滅を成さず、達磨曰く何を以て驗とな

す、二祖曰く了々として常に知る言の及ぶべきにあらず、達磨曰く此れは是れ諸佛所證の心體なり、更に疑ふこと勿れと何と大なる金メタルではありませんか、東西古今斯様な立派な證明は恐らくはありますまい、六祖大師は如何、既に金剛經の讀誦を聞いて心海本然の體は淨智妙圓にして體自ら空寂なるを知られた、故に其の心の活動は不染汚であるべきを識得せられた、而して明々了々々々をも識得せられた、實に應に往する所なく而も其の心を生ずべきである、是れが眞如法性の活動の姿である、見よ本來無一物何れの處にか塵埃を惹んや。是れが我等の本來の面目である、されば明上座に對しての消息は如何不思議不思議正與廢の時那箇か是れ明上座本來の面目、明言下に大悟す、上座曰く人の水を飲んで冷暖自知するが如しと何ぞ親切ではありませんか、永嘉の玄覺に對

するも然りである、僧智常に對するも然りである。

日本の永平承陽大師は如何、天童淨祖の鉗鎚によりて親しく身心脱落し來る身心脱落とは如何曰く身も心も迷雲よりモヌケルのである、栗の針屋裡より充分熟して自然に脱下するが如く不染汚の修證自ら實現の有様を云うのである右の捷徑は何にあるかと云ふに坐禪をするのである、是れが尤も簡便なる唯一の法術である依て歸朝早々普勸坐禪儀一卷を撰述せられて普く其の坐禪の方法と功用とを説かれた曰く須らく言を尋ね語を逐ふの解行を休め回光返照の退歩を學すべし身心自然に脱落して本來の面目現前せん、恁麼の事を得んと欲せば急に恁麼の事を豫めよ、夫れ參禪は靜宗室しく飲食節あり、諸縁を放捨し萬事を休息し善惡を思はず是非を管すること莫れ、心意識の運轉を停め念想觀の

測量を止めて作佛と圖ること莫れと、而して半跏趺坐でも結跏趺坐でも隨意である、要は箇の不思議底を思量するのである、不思議底如何か思量せん、曰く非思量此れが坐禪の要術である、極めて簡短ではありませんか、さて謂はゆる坐禪は習禪ではない唯是れ安樂の法門である故に、如法に坐禪すれば正法自ら現前して、昏沈散亂の心も撲落とてなくなるのである。是れが事實である、即ち明鏡止水の状態が現はるのである、明々々々々々ではあるまいか。然らば則ち上智と下愚とを論せず利人と鈍者とを簡はず專一に工夫すべきである若し能く打成一片ならば自家の寶藏自ら開けて受用如意である。この當體か迷根を挫斷すると云ふのである大死一番すると云ふのである、實に不思議不意惡の正當が本來の面目現前である。茲に於て生死もなく涅槃もなく智もなければ得も

ない、靈光分明にして大千に輝くとても云ひまじやう、此の靈光を認得するの
が尤も大切である、しかし若も一步を誤らば空見の外道に過ぎない。

總持大祖は如何、平生心是れ道と云ふ公案によりに徹證せられた、何と徹證
された、曰く黒漆の昆崙夜裡に走ると、即ち眞黒なる名玉が夜中に走ると云ふ
ことである、黒きものが暗き夜中に走るのであるから跡方が知れない、されば
身心脱落せる明鏡止水の心の本體上より見來れば何事も没蹤跡斷消息に往來す
るが本分ではあるまいか、鳥の空中を飛行し魚の水中を往來するが如くてなけ
ればならない。是が即ち明かなる道の往來である、若しも蹤跡を存するあらば
即ち染汚に屬するのである、心海は波高く明月の靈光を認むることが出來ない
眞如法性の姿が知れない。と云うて遠く求むべきではない回光返照の退歩を

學すべきである、故に更に介祖よりの追究に逢うて飯に逢うては飯を喫し茶に
遇うては茶を喫すと答へられた、是れ光明裡の往來ではあるまいか、我等の
學すべき道ではあるまいか實に平常心是れ道ではあるまいか千佛萬祖の教は是
れてある、最後の勝利は無我の大我を主張せられた、沙門釋迦文佛の手中に歸
したのである今この章を終らんとして太祖大師の最も有がたき御垂誠を摘録し
ます、是れは肥後大慈寺に於ける御示教である。

永仁五年太祖御年三十、肥後大慈寺に寒巖禪師を訪問せられた、禪師大に喜
ばれて宗乗を唱揚せられた。一日禪師の高足某等垂示を請はれた、太祖乃ち曰
く釋迦老師一大事因縁のために世に出現し、直に衆生をして佛知見を開示悟入
せしめ玉ふ、且らく道へ這箇の一大事作麼生か會せん、門より入るものは家珍

に非ず、直に須らく自家の口を開き自家の話を説くべし若し未だ然らざれば縦ひ五千四十八巻を説き得て七縦八横なるも只是れ法身邊の事なるのみ、是の大事に於て遠うして遠し所以に人々只行柱坐臥の處に在りて一絲毫を添ふることも也た得ず一絲毫を減ずることも世々得ず、會し去らば更に些子の氣力を費さず纒かに奇特玄妙の商量をなさば已に交渉なし、言ふことを見ずや、動は生死の本靜は則ち昏沈の郷、動靜介び忘するも佛性を瞞盱す總に不憊麼なるも畢竟如何若し是れ旨外に宗を明むれば終に言中に則を取らずと、弟子等この言を聞き實に甘露を飲むが如し云々。

次に明治の禪界を一瞥するならば兎に角に法雲普蓋禪師と眞晃斷際禪師と兩

禪師様が御編纂になりましたと云ふ修證義五章三十一節の説明で盡きて居ると考へます。先づ釋迦牟尼佛以來歴代祖師方が實參實究せられたと云ふ眞如法性の靈光は如何なる場合に尤も能く發現するかと云ふに、不思議不思惡、無念無作の正當である、即ち作佛をも圖るなきのとき皎々たる光明と現はるゝのである、明々々々々々々々、而して此の状態の靈光に照されて眞實無我に活動すべきであることは昔も今も同じことである。乃て昔の坐禪三昧の代りに最も簡便なるまた平易なる懺悔の法式を唱導されたのである、と云うて新發明ではない、最新應用である。固より諸佛の古法であるが幾分改造が加つてゐる、故に有る意味より云ふならば禪は退歩ではない進歩を意味して居ると思ひます何とならば一箇半箇的化導法でない團體的に而も平易に教化が行はるゝからだ由來進歩は

社界の原則である。その説明は如何と云ふに生死を透脱して是心是佛を識得するにあるを出来得るだけ順序を能く宗教的色彩を帯びて述べられたのだ請ふ試みに之を述べん、佛祖の大道を參得するに人身は受け難いものです。

佛法は値ひ難き者である、然るに今我等此の兩者を得たるは、宿世の善根があるから尤も深く信じて喜び有難主義となり此の最勝の善身を徒らにしない光陰は空しく渡らないと大覺悟すべきを教ゆるのである。何とならばいかに國王大臣でも武功赫赫たる名將軍でも露命は無常の風のために吹き落されて朝の紅顔は夕の白骨と化し去るは人世の一大事實であるからだ而して此身今生に度せずんば更に何れの生を待たんで、此最勝の善身はまた善因善果惡因惡果の道理に支配せられて終に大解脱を得ることが出来ない。即ち宇宙の眞理と合一

することが出来ない、明々々々了々々々でなく、暗々々々黒々々々である。唯だ罪の衆生となつて佛性を暗ますのみである、一波起りて萬波從て生ず生前生死海の風光は實に慘憺である、謂はゆる六道輪廻の免れ難いことは火を視るよりも明らかではありませんか。

然らば如何にせば可ならんかと云ふに茲に佛祖の慈門がある、此門に入らば佛性の靈光が再び光りを放つのである。それは懺悔の法門である、禪道も茲に至りて宗教的色彩を帯び來つた、否宗教と化し去つた。一箇半箇ではない近代的に一切衆生を救済することが出来るのである、その懺悔とは如何なることであるかと云ふに梵語ではサンマ又はセンマと云ひます、支那では悔過と譯します、而して今は懺摩の懺と悔過の悔とを取り合せて懺悔と云うたのである。つ

まり既往の過失を悔ひ改むると云ふことです、即ち三世因果と云ふ明かなる眞理の鏡に照らして我等の身の罪過の最と深きを自覺し、今日より以後過を再びせずと至心に悔悟の誓を立つるのである。而して佛前懺悔と云ひますから佛祖に向て懺悔して御救を求むるのである、此の心の當體現成は身心脱落である。即ち脱落身心である、雪の如く清淨である、月の如く明白である、畢竟空の姿である、我見を離れたる形である、明々々々である、夫れが諸佛の心體の現成であらうと存じます。

明治時代の禪者は斯様に説明して此靈光を宗教的に發揮することに勤めた。第三章に至り第一に佛法僧の三寶を恭敬せよとの註文である、其方法は正に淨信を専らにして合掌し低頭し口に唱へて南無皈依佛、南無皈依法、南無皈依僧

といふのである、其理由は簡短である佛は大師であるから皈依するのである、法は良薬であるから皈依するのである、僧は勝友であるから皈依するのである之を三皈依を受くるといひます。次に三聚淨戒として三つの大切な戒法がある。是れは發動的で自ら勤むる守ると誓ふ意味です、第一攝律儀戒第二攝善法戒第三攝衆生戒である。先づ攝律儀戒とは一切法律と名あるものは悉く守ると云ふことです。第二攝善法戒とは一切の善と名あることはもたらさず勤むると云ふことです。第三攝衆生戒とは一切の衆生のためになることは實行したいと誓ふのです。次に十重禁戒である、是れは三聚淨戒を更に他方面より事實の上親しく細別したのである、戒は防非止惡の義で、斯くくの惡は決定して行ふべからずと訓誡的であります。曰く第一不殺生戒、第二不偷盜戒、第三不

邪淫戒、第四不忘語戒、第五不姑酒戒、第六不說過戒、第七不自讚毀他戒、第八不慳法財戒、第九不瞋恚戒、第十不謗三寶戒である、是れは明々々たる心體の靈光を保護する機關である。故に常に三皈三聚淨戒十重禁戒を持つ人の心の本體は、淨寂光土の風光である。敢て極衆を遠きに求むる必要はない、故に衆生佛戒を受ければ即ち諸佛の位に入る、位大覺に同らし己る眞に是れ諸佛の子なりと安住して宜しいのである、是れ世尊の御證明であります。

第四章の發願利生と云ふは攝衆生戒の細密なる説明と見ても差問はない御覽なさい第十八節に至りては己れ未だ度らざる前にも一切衆生を度せんと發願せよとの意味を示された、その十九節は其形陋しきものでも女人でも小供でも此の菩提心を起すべしとの訓誡である。その方法を四枚の般若とて四ヶ條を擧げ

られた、併し是れは臨機應變の妙用を示されたのだ、別言すれば攝衆生戒の實行細目である、親切なる御教訓ではありませんか。

第五章の行持報恩に至りてはまた攝善法戒の實行細目である、即ち即心是佛なるを審細に參究するが佛恩報謝の第一義であることを示された。茲に至りて禪も殆んど純宗教と化して有難主義と變じた、そこで今の見佛聞法は佛祖面々の行持より來れる慈恩であるを深く解し日々三時に禮拜恭敬し日々の生命を等閑にせず、私に費やさざらんと行ひもて往くのである是れが即心是佛の光明である生死を透脱したる光明裡の往來である、換言すれば家業即佛法の高旨が愈明了ではありませんか。之れ明治時代の禪は戒律中心主義である、又何れの時代でもこれに宜ろしいと考へます、何とならば最後の御説法に釋尊が御證明にな

つたのであります、動かざること大盤石の如くであります、唯だ禪者は之を安樂にもて行くのであります、遺教經に曰く「戒は是れ正順解脱の本なり、かるが故に波羅提木叉と名く、この戒法に因りて諸の禪定及び滅苦の智慧を生ずることを得、是の故に比丘當に淨戒を持ちて毀缺せしむること勿るべし、若し能く淨戒を持てば是れ即ち能く善法あり、若し淨戒なければ諸善功德みな生ずることを得ず、こゝを以て當に知るべし戒は第一安穩功德の所住所たるを」と。

(波羅提木叉は梵語で支那には戒と譯します)

○
月友は女性でありますが大正の禪を述べんとして明治の禪を研究し、明治の禪を述べんとして歴代祖師單傳の禪を一瞥し遂に釋迦文佛に及び茲に最後の一

大発見があるのであります、それは何であるかと云ひますと明治天皇陛下が佛法の保護者であらせられ、又禪の實行者であらせられたといふことであります即ち身を以て一々禪理を御證明下されたといふことであります、法衣を用いさせぬ肉身の佛菩薩であらせられたることあります、今上陛下も然りである。今や日々實行あらせられつゝあります、何とならば兩陛下は異身同體であらせらるゝからであります。

實に不可思議ではありませんか禪道の発見者たる釋迦文佛は王族であります明治天皇陛下も至尊であります而して何れも幼時より聰明絶倫武力も人には劣らない寧ろ大なる優秀者であらせられた事であります。釋尊は七才にして天文地理等に通ぜられ、十歳には諸王子と武力を角して誰も及ぶものはなかつた。

明治天皇様は安政五年即ち七才まで中山家にて御生育あらせられ七才にして禁裡の人とならせられ、萬延元年九月二十八日九才にして皇儲に御立ち遊ばししました、同じく文武兩道を非常に御好てありました、釋尊は十五才にして立ちて太子となられたが、陛下の方が五年も御早く皇太子の位につかせられた、明治天皇は慶應三年正月十六才にして踐祚ましし明治元年十二月二十八日十七才にて皇后宮御入内、釋尊は同じく十七才にて耶輸多羅姬を容れて妃とせられた。釋尊は十九才にして出家し終に正覺を成ぜられ、三界の大導師として心靈界の法王となられた、明治天皇は明治元年三月十四日五ヶ條の誓文を以て國是を定め給うた。是れから方向異りましたが販する所の目的は同じであります。何ぜならば凡てが大慈悲心の發現であるからです。

- 一 廣く會議を興して萬機公論に決すべし
- 一 上下心を一にして盛に經綸を行ふべし
- 一 官武一途庶民に至るまで各々志を遂げ人心をして倦まざらしめん事を要す

一 舊來の陋習を破り天地の公道に基くべし

一 知識を世界に求め大に皇基を振起すべし

尋いて又詔して「我國未曾有の變革を爲さんとし、朕躬を以て衆に先んじ、天地神明に誓ひ大に斯國是を定め、萬民保全の道を立てんとす、衆皆此趣旨に基き協心努力せよ」と仰せられた世之を五條の誓文と申します、史家は此誓文を以て天祖の神器を天孫に賜ふに當り下す所の神誨に比しますが尤もであります

す、實に有難き覺召てはありませんか。

明治天皇は此誓文を基礎とせられ皇國の進展を圖らせられ、八年四月には立憲政體の詔書を賜はり十五年一月四日には陸海軍人に對し其精神となすべき五大綱を掲げて詔書を賜はつた。

一軍人は忠節を盡すを本分とすべし

一軍人は禮義を正しくすべし

一軍人は武勇を尙ふべし

一軍人は信義を重んずべし

一軍人は質素を旨とすべし

二十二年の二月十一日には憲法を發布せられ、二十三年には帝國議會を召集せ

られ、茲に政體上の大規模が完成せられた。然れども文明の眞の源泉は教育にして教育の根柢はまた眞正の道德を以て主とせねばならぬ事は固より御熟知の上でありますから、二十三年十一月三十日に一般國民に教育勅語を下された。而して上下共に實行すべきを教訓せられました。

朕惟ふに我が皇祖皇宗國を肇むること宏遠に徳を樹つること深厚なり。我が臣民克く忠に克く孝に億兆心を一にして世々厥の美を濟せるは此れ我が國體の精華にして教育の淵源亦實に此に存す。爾臣民父母に孝に兄弟に友に夫婦相和し朋友相信し恭儉己を持し博愛衆に及ぼし學を修め業を習ひ以て智能を啓發し徳器を成就し進て公益を廣め世務を開き常に國憲を重んじ國法に遵ひ一旦緩急あれば義勇公に奉じ以て天壤無窮の皇運を扶翼すべし。是の如

きは獨り朕が忠良の臣民たるのみならず、又以て爾祖先の遺風を顯彰するに足らん。

斯の道は實に我が皇祖皇宗の遺訓にして子孫臣民の俱に遵守すべきところ之を古今に通じて謬らず之を中外に施して悖らず朕爾臣民と俱に拳々服膺して咸其の徳を一にせんことを庶幾ふ。

明治二十三年十月三十日

御名 御璽

斯くて更に各方面に向つて、教育の發達を指導あらせられた、然るに二十七八年戰役三十三年の北清事變三十七八年戰役と漸々國威發揚して吾國は今や世界の一等國の伍に列するのみならず東洋文明の中心となつたのである、之と同時に

に我國の一舉一動は全世界に重大なる影響を與へ我國民の一進一退は同盟諸國に對して非常なる責任を有する様になつた、而して國家の文明は唯だ武力ばかりではいかぬ又利口ばかりでもいかぬ、世界の全局面より打算し我國の位置と我國民の責任とを重んじ政治教育實業經濟の大より一言一行の末に至るまで毫も缺點の無き様に圓滿に發達することを心懸けねばならぬ若しも勝て甲の緒を締むることを忘れ人心日に浮華に流れ民情動もすれば輕佻に走り徒らに我利我利忘者の御仲間が殖る様では一時の油斷より意外の大敵を招くの恐れがある、是れ明治四十一年十月三日戊申詔書を下し賜はつた所以である。

朕惟フニ方今人文日ニ就リ月ニ將ミ東西相倚リ彼此相濟シ以テ其福利ヲ共ニス 朕ハ爰ニ益々國交ヲ修メ友誼ヲ悖ウシ列國ト共ニ永ク其ノ慶ニ頼ラムコ